# 教育研究試論

## ——形成的環境としての文化——

佐　藤　良　吉

目　次

(1) 人間と文化 (一)人類の祖先 (二)人間の特質(三)文化の始源 (四)文化の三方面　(2)文化の諸相(一)物質文化(二)精神文化(三)制度的文化　(3)形成的環境—文化(一)文化の形成力(二)書物の影響(三)芸術の薫成(四)宗教の触発

### (1)　人間と文化

**(一)人類の祖先**　ひとと他の動物の大きな違いは，ひとが文化 (culture) をもった存在であるということである。ひと以外の動物であって，文化を身につけて生活している生きものはいない。この意味でみるかぎり，ひとは文化をもった存在であるという特殊性において，明らかに他の動物と区別することができる。しかしこのようなひとも，かつて古い時代においては，今日みられるような文化を，初めから身につけて生活していたわけではない。容貌や外見がけもの同然であったように，文明 (civilization) のかげ，文化のひとかけらすらない，野蛮未開の生活をしていたのである。

この地上にこうしたひとの祖先がいつごろ出現し，どのような生活をしていたかは，くわしいことはわからないが，古い地層からつぎつぎに発見される人骨や歯の化石は，その秘密を解きあかす一つの手がかりとなっている。これら化石遺物のなかで，いちばん古い人類の骨の一つと思われているのは，1924 (大正13) 年，Dart (1893—) によって，南アフリカ連邦（トランスヴァール地方）の第三紀末の地層から発掘された子供の頭骨である。

それは前期旧石器時代，いまから80～100万年以上まえに生存し，顔の部分だけが残っていたが，脳の大きさはゴリラ程度で，類人猿よりも高い知能をもっていた。この系統の化石はその後いくつも発見されているが，いずれも直立歩行をしていた形跡があり，南のサルという意味で，アウストラロピテクス（Australopithecus Africanus）と名づけられた。類人猿と原人類の中間の形態のものと推定され，いわば人猿ともいうべきものであった。つぎに古いのは1927（昭和2）年，Black（1884—1934）によって北京郊外周口店で，最新世中期の地層から発掘された北京原人（Sinanthropus Pekinensis）のものと，1890（明治23）年，Dubois（1858—1940）によって，インドネシア，ジャワ島トリニールの最新世中期の地層から発見されたジャワ原人（Pithecanthropus Erectus，直立猿人）の大腿骨と歯である。身長は前者が155cm，後者は170cmほどであった。また1856（安政3）年には，旧人（Homo Neanderthalensis）のものもドイツで発見されている。これらは中期石期時代，いまから数万年から十数万年以前に，アジアやアフリカ地域に広く住み，今日のわれわれとよく似ているところから，同じヒト属(Homo）のなかにいれられている。このほか現在のひと（Homo Sapiens）と同種とされている現生人類（Cro-magnon）のものは，1868（明治元）年フランスで発見された。かれらは第四紀洪積世第四氷河期末に生存し，アジアやアフリカ，オーストラリア地域に広く住み，種族としての地方差があり，それぞれその地方に住んでいる人種とよく似ている。時実利彦著「人間であること」所収「人間の祖先」は，以上これらのことについて，あらましつぎのように紹介している。

1924年にダート（R. A. Dart）によって，南アフリカで発掘されたのは，アウストラロピテクス（猿人）である。前期旧石器時代で，80～100万年前に生存していた。身長は120センチで，石やカモシカの骨で作った道具を使って，動物や植物を食べていたらしい。まだ，ことばを話す能力はなかったが，住居はあったのではないかといわれている。180～200万年前に生存していたというから，アウストラロピテクスよりも年代は古いが，形のうえではより進化しているホモ・ハ

ビリスと命名された化石人類が，1964年に東アフリカで，リーキ　によって発掘されている。進化の系列は，アウストラロピテクスとは別であろうと考えられている。これにつぐものは，ホモ・エレクトスとよばれている約50万年前に生存していた化石人類である。1890年に，デュボア（E. Dubois）によってジャワで発掘されたジャワ原人（ピテカントロプス・エレクトス）と，1927年に，ブラック（W. D. Black）によって北京郊外の周口店で発掘されたペキン原人（シナントロプス・ペキネンシス）とである。前者の身長は170センチ，後者の身長は155センチで，手は物を握れるようによく発達していた。道具を作り，火を使っていたという。ことばを話して社会生活を営んでいた形跡が残されている。

このあとは，中期旧石器時代にあたる数万年から十数万年前に生存していたネアンデルタール人（旧人）である。さきに述べたように，最初に発掘された化石人類であって，身長は155センチくらいという。槍を作って狩りをし，いろいろな道具を作り，火を使って生活していた。洞穴にも住んだが，家を作っていた形跡もある。ことばも話しており，社会的生活を営み，死人に対して墓を作っていたらしい。ネアンデルタール人の仲間で，きわめて完全な姿で発掘されたのがアムッド洞人だという。1961年に，イスラエルのアムッド洞穴で掘りだされたもので，頭はネアンデルタール人であるが，顔はホモ・サピエンス（現生人類）で，移行型ではないかという。約4万年前に生存しており，かなり進んだ文化をもっていたようである。南フランスで，1868年に，クロマニオンとよばれている化石人類が発掘されているが，2～3万年前に生存しており，新人，すなわち現生人類（現代人）である。オレオピテクスからホモ・サピエンスまでの進化の過程で，……当然，それを支える脳の進化がみられるはずである。

**㈡人間の特質**　ライフ大自然シリーズ(Life Nature Library）所収，Howell著「原始人」(Early Man，寺田和夫訳）は，「ホモ・サピエンスへの長い道のり」のなかでつぎのように述べあわせてプリオピテクス（Pliopithecus）から現生人類に至る，かれらの形態復元図を所収している。

類人猿に似た祖先からホモ・サピエンスにいたる，ヒトの長い進化の各段階は，どのようなものだっただろうか。今日の科学者に知られている霊長類とヒトの進化の里程標で，化石による断片的な証拠をもとにしてつなぎ合わせたものである。この一連の図は，いかに多くのことが，いかに少ないものから学びとられたかを，具体的に示している。たとえば右の写真の，なんの脈絡もなさそうな骨の集まりが，ヒトのもっとも初期に属する二本足のアウストラロピテクスの歩く姿を完全に示してくれるのである。これらの図の大部分は，下あご一個とか，ときには歯が少々といった，実にわずかの骨片から復元したもので，専門家による推測の産

物である。今後の研究で修正を要することがあるとしても，ともかくも彼らがどんな姿をしていたかを図示することには，それなりの価値があろう。彼らが生存していた時代については上の方に掲げた地質学年代表で表示している。帯が切れているのは，ある系統が絶滅したか，あるいは，いまだに化石が発見されていないことを意味するものである。原始類人猿と現生類人猿はどちらも四足歩行をするが，比較の都合からここでは立った姿勢で描いた。

これら復元図を見て気づくことは，かれらがいずれも今日の通常の概念でのひとというよりも，むしろけものに近く見えることである。例えばネアンデルタール人（旧人）についてみても，全身が毛で覆われ，頭部は彎曲し，鼻は小さくて巾が広く，口は突き出て，ひたいはせまく，眼のうえにはひさしのような骨格が突出しており，いずれも外見でみたかぎりでは，容貌，体つきともにけものに似ている。このようなかれらが，どのような生活をしていたかはおおよそ想像がつく。かれらの生活は第一に，何よりも生きること，生命の維持と存続に向けられていた。かれらはこのため食物を探し求めて山野をかけめぐり，渇きをいやすために水を飲み，ねむくなれば眠り，呼吸して生命を維持し，老廃物は排泄し，手足を働かせて動きまわっていたはずである。それがかれらの生活のすべてであり，この点でみるかぎり，かれらもまた野生のけものそのものであり，動物以外のなにものでもなかったのである。

しかしこのようなかれらが，けものとまったく同じであったかといえば，けっしてそうではなかったのである。かれらの容貌や体つきは，確かにまぎれもなくひとよりもけものに似ていた。生活も野蛮未開で，けもの同然の有様であった。それにもかかわらず，かれらは間違いなく，けものではなくひとであった。それはかれらの外見上の形態や容貌，あるいは体つきや生活の有様がどうであれ，かれらは疑いもなくひとに向って，すでに文化へまでの道すじを，確実に歩みはじめていたという確かな証拠にもとづいている。Mumford (1895—) は，以上このようなひとの特質について，「人間—過去・現在・未来」(The transformations of man, 久野収訳) のなかで，

かれらを「人間にむかう動物」と評価し，「この動物は人間になる方向にむかって，最初の一歩を踏み出した」と，以下引用のように述べている。ここで人間になる方向とは，いうまでもなくひとがけものの域を脱して，文化に向う方向を意味していることはいうまでもない。

> 地球の大部分が熱帯性気候をほこっていたとき，樹上生活をしていた類猿的霊長類のムレから人間はたちあらわれたようである。少なくとも一つ以上の場所で，少なくとも一つ以上の時点に，この動物は，人間になる方向にむかって，最初の一歩を踏み出した。代謝作用に生じる，ある変質，遺伝子に生じる，ある突然変異，しかもたぶん，ある内的はずみと必要が，比較的にせよ，はつかねずみ以外のどの動物よりも大きな脳を人間にあたえた。その脳を使って何かをつくろうとする人間の持続的衝動が，人間をその長い生涯へと旅立たせた。この変化は，人間をして，いっそう複雑な現実世界に生きながらえさせ，むしろ現実世界の多様な複雑さと可能性を会得させることを可能にした。この変化はまた，より大きな身体的熟練，いっそう微妙な相互調整，外側からの刺激と内側からの衝動の両方に対する，いっそう深い敏感さ，学習へのより大きな素質，いっそう強い記憶力，人間のどの先祖がかつてほこりえたよりも，もっと細心な予見を結果させた。

**㈢文化の始源**　以上のような人間を特徴づける文化の始源は，かれらが直立歩行によって，自由になった両手を用い，第一に，道具をつくり使用することをおぼえたこと，第二に，火を発見して生活を豊かにすることができたこと，第三に，言葉を生み出し，コミュニケーションの便宜に役立てることができたことなどのなかに，もっともよくその原型をみることができる。このうちまず第一に，道具の制作と使用についてみると，その始源は古く，アウストラロピテクス（猿人）の時代にまで淵って考えてみることができる。かれらはすでにそのころ，森林を出て平原に群れをつくって住んでいたが，食物も植物性のもののほか，肉食することもおぼえはじめていた。最初はおそらく，他の動物の食べ残した肉を食べていたに違いないが，しだいにかれら自身で捕獲した動物の肉も食べるようになった。かれらはこうして肉食することをおぼえ，肉食に慣れてくるにしたがい，動物を手にいれるための道具が必要になった。かれらはそれ以前にも，身

のまわりにある木片や石塊，あるいはカモシカの角や動物の長い骨（肩甲骨）などを，何んの意識もなく偶然に手にし，役立てていたかも知れない。しかしそれが日常，普通に用いられるようになると，そこにしだいに道具の意識が生まれ，自然のなかにあるものを利用すれば，道具（石器）がつくれることに気づきはじめた。シナントロプス（北京原人）は石塊で，礫石器（Pebble tool）をつくったことで知られているが，道具（石器）をつくり，それを生活に役立てたのは，かれらが人類最初の生きものであったといわれている。

礫石器は河床や海辺の水の作用で円くなった石塊を，他の堅い石にたたき落して割り，先端を尖らせてつくった道具である。かれらはこうして自らの意志で自然にはたらきかけ，目的にあわせて工作し，道具をつくり，それを用いて生活に役立てることに成功したのである。事実，かれらはこれらの道具を用いてけものを捕獲し，肉や筋肉の切断に役立て，敵と戦う武器ともした。それがどれほど単純で，とるに足らないものにみえたとしても，道具をつくり，それを生活用具として用いたことの意義は大きい。かれらがけものの域を脱して，ひとの生活へまでの一歩を踏み出すことができたのも，疑いもなくこのような道具，すなわち文化の恵沢によっていた。道具は文化そのものであり，それをつくり出し，生活の利便に供することも，また文化そのものであった事実に変わりはない。前出書「原始人」はこのような道具，すなわち石器について，「古代の道具箱の中身」として，あらましつぎのような紹介をしている。

ヒトがつくり，ヒトが使ったと認められる最古の石器は，礫石器(pebble tool)と呼ばれるものである。この名前は今ではあまり使われず，代わってチョッピング・トゥール（chopping tool），またはたんにチョッパーという言葉が使われている。チョッパーにはピンポン玉くらいの小さなものもあれば，玉突きの玉ぐらいの大きなものもある。大部分は河床か浜辺にあって，砂や水の動きでなめらかになり，丸味をおびた石からつくられた。このような水でまるくなった石は，使うとき手のひらを傷つけることがないので，しっかりとつかむことができた。そ

れを道具にするため，一方の端を他の石でたたき落とした。こうして刃のようなものか，あるいはポイント（尖頭器）のようなものができあがった。それは，きわめて原始的で粗末なものだったが，ないよりはましだった。もっと原始的なものになると，自然力で先がとがったり刃がついたりした石と区別がつかないので，だれにも道具だという見分けはつかないだろう。

それにもかかわらず，確かに古代の道具箱にはもっと原始的な道具が入っていた。一カ所にたくさんのかけらや剝片があることは，かつてそこで道具づくりが行なわれたことを示している。何度も強打したり乱打したりしたあとがある石は，ハンマーか鉄床として使われたものかもしれない。また，ある遺跡で一般には出ないような種類の「よその石」があることは，たとえその石自身が打ち欠かれていなくても，道具の使用を物語っている。最古の遺跡で，もっともよくみいだされる種類の道具はチョッパーではない。もっと小さいかけらとか，自然に形のついた石の方がはるかに数は多い。この自然に形のついた石は，だれ一人石を自分で削ることを思いつかなかった数百万年間にわたって，ヒトの道具の主要な源泉だったにちがいない。そのような石は，発見された状況がわかってはじめて道具として認められるのである。

かれらはこうして道具の文化を手にいれ，それを生活に役立てることによって，けものからひとへ，文化へまでの傾向をいっそう強めた。そこには素朴でささやかではあるが，目的意識にもとづく自然への意図的なはたらきかけがあり，文化に向う萌芽がみられる。祖父江孝男著「人間の文化」所収「文化の発生」は，これら人類の道具の使用の意味について，ひとの環境への適応能力を拡大させたものとみてつぎのように述べている。

人間が動物を引き離して著しい進歩をとげることを可能にした身体上の特質としては，他にもいろいろある。その中でも最もよく指摘される点は，人間が二本の肢で直立できるようになったという事実であってこのため前肢は「手」として自由に使えるようになったのだった。こうして人間はいろいろ複雑な動作をおぼえ，殊にさまざまの道具を作り出し，それを使用することができるようになったのだった。石でオノを作り，木やつる草で弓を作り，こうして進んだ武器や道具が生み出された。人間は動物に比べて体力は弱い。しかしその代わりに，こんな道具を次々に作り出して体力の不足を補ってしまった。人間の何倍もあるマンモスまでも，人間が二本の手でこしらえたおとし穴に落ちこんで，簡単に捕えられるということになったのである。

シナントロプス（北京原人）の場合は，人類の祖先全体のなかでも，とりわけ重要な位置と地位を占めている。それはかれらが第二にあげた火を発見し，その使用に成功したからである。しかしこのようなかれらも，最初から火をつくり，それを用いることを知っていたわけではない。おそらくかれらは偶然に火に出会い，火を手にし，その使用の方法をおぼえたに違いない。例えば落雷とか自然発火などで，草原や森林に燃え移った火の残り火を，火種として保存し使用したはずである。かれらはこうして火を手にいれ，火に親しみ，火を用いることによって生活を豊かにすることができた。肉を焼き，冬の寒さに耐え，夜の暗黒の恐怖や野獣の襲来から身を守ることができたのも，ことごとくこのような火の恩恵によっていた。いいかえればかれらは，火の使用の方法を知ることによって，けものの域からひとへまで，文化の段階へと，いっそう確実に近づくことが可能になったということである。火はこのようにして，かれらをけものの域からひとへまで，文化の段階へと導く文字通りの灯，あるいは案内者となった。Augusta 著「人間の祖先」（Prehistoric Man, 木村達明訳）所収，「火を使うようになった人類の祖先」の項は，「火は人類の文化の保護者であった」とみて，人類と火の出会いの模様をつぎのように興味深く紹介している。

周口店で発見されたシナントロプス（Sinanthropus pekinensis）は，人類の祖先全体の中でも非常に重要な位置を占める。彼らはすでに火に親しんでいた。彼らのたき火の跡が発見されたときは非常な驚きをもたらしたものである。彼らが自分で火をつくることはできなかったと思われる。落雷によってステップの乾燥した草に火がつき，それがやぶや林に燃えひろがったようなときに，偶然に得られたものであろう。もちろん，シナントロプスははじめは火をおそれ，火から逃げ去って洞穴にかくれた。しかし，火が消えてほのおがもはや空中高く昇らず，堪え難い熱さがなくなったとき，多分勇敢なあるものが，火のそばまで近づいたことであろう。好奇心強く燃えさしを調べ，それをつついて見て，飛び散る火の子におどろいて飛びあがったにちがいない。ある者は，乾いた草や小枝を燃えさしの上においたかも知れず，それが燃え上るのを見て，このものを生かせておくには何をえさにやったらよいかということに気付いたことであろう。この燃えさしをどうやって彼らの洞穴に運んだかについてはわからない。うつろな骨に入れ

て運んだかも知れず，大きな枝の端を燃やしたままもちかえったかも知れない。だが，彼らが洞穴でたき火をして，これを注意深く何世代にもわたって番をしてきたことは，その灰の層が20フイート以上にもなることを見ても明らかである。

火の所有と使用は，シナントロプスにとって大きな重要性をもっている。野獣は火を恐れ火の燃えている洞穴を敬遠した。火のあかりは，暗闇に対する恐怖心を取り払ってくれた。火によって暖かさを得られたし，ほのおや燃えさしの中に投げ入れた肉はよい匂いを立てた。シナントロプスがステップの大火事の後をおっていったとき，疑いもなく沢山の動物の死体があって，半焼けの肉がこうばしい匂いを立てていたことであろう。そこで後になって彼ら自身が獲物をあぶるようになった。これは風味のためばかりでなく，焼くと肉がやわらかくなるからである。このあまり恵まれない気候条件の土地で，シナントロプスが実に長年月にわたって（何世代も）生きつづけることができたのは火を使ったことのたまものである。このような太古から，すでに火は人類の保護者であり友達であったのである。

人類にとってさらにいっそう革命的であったことは，かれらが言葉を身につけ，話すという方法を用いて，相互に意志の疏通ができるようになったことである。かれらはこうして第一に，道具を用い，第二に，火に親しみ，第三に，言葉を身につけることによって，ひと（文化）へまでの道すじを確実にした。このようにみてくると，かれらが言葉を身につけ，話すことによって意志の疏通をはかり，知識や経験を獲得し，さらにそれを広く伝播，拡散することに成功した意義ははかり知れない。このような言葉の発生に必須な条件は，脳がそれ相応に発達していなければならないということである。これをピテカントロプス（ジャワ原人）の場合についてみると，かれらの脳容積は猿人（Ape man）の400～600 cc，現代人の平均が1420cc であるのに対して，800～1000ccであった。これら脳容積から脳の重さを推定すると，猿人が450g，現代人の平均が1350g であるのに対して，かれらの場合は750gほどであって，現代人のそれにはおよばないが，猿人と比較するとはるかに重いことがわかる。しかもかれらの優位は，このような前頭部だけでなく，視力や聴力を支配する後頭部についても同じようにいえた。かれらはこのため観察力にすぐれ，見たものをよく理解し，ま

た音を真似たり，新しい音をつくってそれを聴き分けることもできた。そのことは頭蓋の左前下部にわずかながら，渦巻（巻縮）の輪郭がみられることからもわかる。いずれにしてもピテカントロプス（およびシナントロプス）によって，人類最初の言葉が用いられるようになったことは確かである。その能力や言葉の機能が，どれほど未熟で原始的なものであったとしても，言葉を身につけ，話すという方法を用いて，意志の疏通ができるようになったことの意義は大きい。かれらはこうして言葉を用いてコミュニケーションの道具とし，やがて共同生活をいとなみ，経験や知識を蓄積し，分播拡散することができるようになったのである。上出書「人類の祖先」は，ピテカントロプス（ジャワ原人）の言葉の発生の条件について，あらましつぎのような紹介をしている。

ピテカントロプスの頭は類人猿と多くの共通の特長をもっている。ピテカントロプスの頭がい骨は，現在の人類のそれよりは小さいが，類人猿の頭がい骨と比較すればかなり大きいものであった。このことは，例えば成熟した雄ゴリラの大きな頭がいを見たことのある者にとっては奇妙にきこえるかも知れない。しかしながら，類人猿の頭がいはあてにならない。というのは，頭がいのアーチのまわりに大きな骨が突出した部分があり，それに筋肉が付着しているからである。ピテカントロプスの頭がい骨にはこのような突出した部分はない。したがってそれは小さく見えるのであるが，頭がい骨の実際の容積は大きい。脳の大きさを考えるのに重要なことはこの脳容積である。頭がいの容積をはかると類人猿の 400～600ccに対してピテカントロプスは800～1000ccもある。現代人の平均は1420ccであるからこれにははるかにおよばないとしても，なおかつこれによってピテカントロプスは類人猿からはっきり区別されるものである。頭がいの容積から脳の重さを推定すると，類人猿の 450 グラム，現代人の平均1350グラムに対し，ピテカントロプスでは 750 グラムほどである。

多くの学者はピテカントロプスの頭がい骨の特長から，その脳の形態，発達程度などを研究した結果，大きく高度に発達した類人猿の脳であると結論した。しかし最大の特長は，前頭部が大きく発達していることであるが，ここは高級な思考能力の役割を果すところである。このことは類人猿と比較して，疑いもなく優位であり決定的な進歩であるといえる。また左前頭部が大きいことは，左手よりも右手のほうが活動的であり器用であることを示している。したがってピテカントロプスは現代人のように右ききであったわけである。決定的な進歩は前頭部に

ついてばかりではなく，視力と聴力を支配する後頭部，およびこめかみの部分もまたよく発達していることである。したがってピテカントロプスは動物よりも観察力がすぐれ，見たものをよりよく理解し，視力によって原始的な仕事をもすることができた。また音を真似ることもできたし，新しい音をつくってそれをききわけることもできた。かくしてピテカントロプス（およびシナントロプス）によって，はじめて人類のことばができたわけである。そのことばの最初のものは単純で原始的なものであったであろうことはもちろんである。このことは，ピテカントロプスの頭がいの左前下部にわずかながら渦巻（巻縮）のりんかくがあらわれていることからもわかることである。この巻縮は現代人では顕著でありブロカス中枢として知られている言語活動の中枢をなすものである。ピテカントロプスはエルンスト・ヘッケル教授の想像したように，言語機能を欠いていたわけではなかった。しかし，もちろんその能力やことばの構造が極度に原始的であったことは当然である。

以上これらのことからも明らかなように，かれらは第一に，道具を用い，第二に，火に親しみ，第三に，言葉を身につけることによって，けものの域を脱してひとにまで進化した。進化の「進」は年月の流れを意味し，「化」は生物の変化をさしている。かれらが長い年月の流れのなかで，けものからひとにまで進化したのは，ひとえに文化の恵沢によっていた。人類はその発祥の段階において，すでにひとに向う可能性をもっていたが，事実，それを培い助成したのは確かに文化である。この意味でみれば，文化を生みだしたのはひとであるが，かれらをひとにまで導びいたのもまた文化であった。Chauchard が「人間の生理学」(Précis de biologie humanie, 八杉竜一訳)のなかで，「人類では進歩は文化的なものになった」といい，「われわれは自分たちの祖先である野蛮人から，文化や教育によって隔てられているのであって，いかなる生物学的違いも，いかなる才能の真の進歩もあったわけではない」として，つぎのように述べているのもこの意味である。

純粋に自動的な生物学的進化は，種をより完成された種で置き換えることに基づいているが，人類では進歩は文化的なものになった。人間はその大脳によって無限の力を与えられ，個々の発明を調和させる全体的な努力によって，この力を

使用することを学んだ。より大きな大脳への生物学的上昇に，この大脳を活用する方法の心理学的完成がひき続いた。すなわち人類をはじめて自然の決定因子から解放して，風習や社会的決定因子に結びつけた意識や内省の上昇が，ひき続いた。われわれは自分たちの祖先である野蛮人から，文化や教育によって隔てられているのであって，いかなる生物学的な違いも，いかなる才能の真の進歩もあったわけではない。人間の本性，それはわれわれが所有している生物学的な能力であるが，この能力は一度に実現したのではなくて，人間の何世代もの不断の努力を必要としたものであり，その結果，各時代の人間たち，また順次に続く文化の中に生きていた人たちは，互いに，その精神生理学的行動や，風習の点で，大いに異なっていたことであろう。生物学は，歴史を生物学的進化として考察しなければならないことを，われわれに示している。すなわちそこには，種々な文明の歴史的事実の数多くの変遷である人間の種々な適応が存在していたし，また人類史の60万年を思いみる者には否定することのできない人間性の一般的上昇があった。

**㈣文化の三方面**　ひとは人類の発祥のむかしから，自然にはたらきかけ，自然を対象とし，これに手を加え，文化を生み出し，生活に役立てるとともに，自分自身をも形成して今日に至っている。文化とは結局，ひとがこのように自然に手を加えて自然をつくり変え，自然のままではないものを生み出し，生活を豊かにし，自分自身をも培い形成するいとなみの全部ということになる。それは例えば農夫が土地を耕し，作物をつくり出すいとなみに似ていて，そのことは文化（cultur）の語源が西欧では，ラテン語のcultus, すなわち「耕す」,「耕作」からきていることをみてもわかる。このように文化は，自然にはたらきかけ，自然を対象としながら，自然のままではないものをつくり出すいとなみのことであるが，この場合はたらきかける自然に，大きく分けて三方面があることに気づく。その第一は，ひとの外にある自然，いいかえれば自然環境，すなわち自然のなかのありのままのもの，物質を対象とした場合の自然であり，第二は，ひとのなかの自然，いいかえればひとの本性を対象にした時の自然であり，第三は，ありのままのひとの生き方，生活の仕方，あるいは様式を対象にした場合の自然である。ひとの外に存在する自然，すなわち物理的環境が自然であるこ

とは当然であるが，ひとの内面本性もまた，疑いもなくひとのなかの自然であり，ひとのひととしての生き方にしたがう生活の仕方も，同じく自然の一方面であることに変わりはない。

以上これらのことを念頭に文化の諸相についてみると，自然に三方面があるように，文化にも三方面のあることに気づく。いいかえれば対象とする自然の方面を異にすれば，文化もまた姿を変えてあらわれてくるということである。具体的にはひと以外の自然，すなわちもの（物質）を対象とした場合には物質文化（material culture）となり，ひとのなかの自然，すなわちひとの本性を対象とした時には精神文化（moral civilization）が生まれ，生活の仕方の方面を対象とした場合には，制度的文化が形づくられるということである。このほか今日では，これら文化の諸方面を複合した，生活文化ともいうべき領域も成り立つ。

## (2) 文化の諸相

**㈠物質文化**　人類も発祥の太古の時代においては，上述のように他の動物と同じく，自然に近い野蛮未開の生活をしていた。しかし人類が直立歩行をするようになると，前肢の自由が獲得され，大脳が発達し，やがてひとはそれらのはたらきをかりて道具を工夫し，それを役立てて生活をつくり変えてきた。それ以前にもかれらは，あるいは生活の便宜のために，身のまわりにある木片や石塊，または動物の角や長い骨（肩甲骨）などを偶然手にし，それを無意識のうちに使用し，役立てていたかも知れない。しかし自分の意志や目的にあわせて自然にはたらきかけ，自然をつくり変え，道具を工夫し，工作するようなことはなかったのである。それがアウストラロピテクス（猿人）属群のうち，1959（昭和34）年，東アフリカで発見されたジンジアントロプス（Zinjanthropus）になると，石を打ち砕いて礫石器（pebble tool）をつくり，これを道具として生活に役立てることができるまでに進化した。事実，かれらは人類のなかで，自然のなかのもの（物質）

を利用し，これに手を加えて工作し，道具をつくり，それを生活に役立た，最初の祖先であったと考えられている。

かれらはこうして道具（石器）をつくり，それを用いて動物を捕獲したり，肉や筋肉の切断に使い，敵や野獣と戦う武器とした。これら道具（石器）類はきわめて単純で，生活用具とはいえないほどの幼稚なものであったが，自分の意志で自然物（石塊）にはたらきかけ，手を加えて工作しなければ，自然のままでは存在しないものであった。かれらはこうして道具をつくり，経験を積みかさね，知能をはたらかせて，少しづつ自然を変え，生活を豊かにしてきた。前出書「人類の祖先」が「石は人間の力の最初のシンボルであり，最初の武器であった」と述べ，このような石器が実は人類文化の基礎，始源にほかならないとしているのも当然のことである。やがていまから一万年ほどまえ，すなわち新石器時代（new stone age）になると，上述した石器類の作り方も複雑になり，打製石器のほかに，研いだり磨いたりしてつくる磨製石器も工夫されるようになった。人類の文化はこうして，単純ではあるが，道具（石器）の制作と工夫，あるいはその使用による物質文化を泉源として発祥した。前出書「原始人」所収，「道具の意義」の項によれば，このような石器類は，およそつぎのような使い方がなされていた。

いろいろな石器の名前は，それがはじめて地中から掘り出されたとき，太古にどのように使われたかを想像してつけられたものである。石器の用途が正確にわかるわけはないが，現代の道具との類似性や，単純な狩猟民の生活の必需品などを考え合わせて命名されているので，その名はかなり合理的なものといえる。用途を想像しにくい場合には，たとえば多面石器というように，その形状にもとづいた名前がつけられた。ずっと前につけられた名称でも，今日そのまま使えるものが多い。(1) チョッパー　ふつうは，こぶし大の岩石からつくられたもので，古代の万能石器である。木をたたき切ったり，骨を割ったりするのに使われ，またおそらくは敵と戦うのにも，使われたものと思われる。(2) サイドスクレーパー　この横刃の削り器は，進歩したムステリアン工作の典型的な石器で，ネアンデルタール人の遺跡にきまってみられるものである。これはつくるのは簡単だが，刃はなかなかじょうぶである。(3) 後期の握斧　これは円筒技法によって，刃が

きわめて精巧につくられるようになった。大きさはいろいろあるが，この石器は，おそらくえものを切り裂いたり，皮をはぐために使われたものと考えられる。(4) ビュラン　これは後期石器時代の非常に特徴のある石器で，いろいろな種類がある。のみのような刃をしていて，たとえばビュランで角に2本の平行な切れめを入れ，細い針の材料を取ることもできた。(5) 穿孔器　剝片を打彫してつくったものだが，たぶん動物の皮に穴をあけるきりとして使われたのだろう。とすれば，この出現は，はじめて衣服がつくられるようになったことを示すのかもしれない。(6) 原始的な握斧　これは今日のつるはしのような道具で，両面とも細工が粗雑であるが，先端はかなり鋭くつくられている。食用になる地中の塊茎などを掘るさいに，こうした道具が使われたのかもしれない。(7) 多面石器　この名前は，小さな剝離面がたくさんあるところからきているが，おそらく骨を砕いたり，割ったりするのに使ったのだろう。また，動物や外敵にぶつける飛び道具にもなったと思われる。(8) 歯状石器　刃の中央部にえぐりのある道具で，木を細工する幅刀のように使ったものだろう。この石器は，それだけでは直接役には立たないが，他の道具をつくるのには役立った最初の工具といえる。(9) ルバロワジアン・ポイント　これには鋭い刃がついていて，表面のつくり方からみると，やりにつけたものだろう。攻撃用としても，防御用としても使え，投げるよりはむしろ突くやりとして用いられたにちがいない。(10) グラベチアン・ポイント　後期旧石器時代のナイフ状の有背石刃（バックト・ブレード）であり，投げやりの穂先として使われたものだろう。これらの石器は，いくつかのクロマニヨン人の遺跡で発見されるだけである。(11) バックト・フレーク　峰つきの剝片という意味のこの名は，ナイフのように峰があるところからつけられた。長い石刃で，万能の切り出しとして使われた。肉などはいとも簡単に切ることができたにちがいない。

これら石器類とともに，当時すでに木器類も使用されていたが，新石器時代には，さらに粘土に加工した土器もつくられるようになった。粘土も自然のなかの物質の一種であり，それは石や木よりも加工が容易であったために，いろいろな形のものもつくられた。こうして粘土を素材にした土器は生活用具として，食物を煮たり貯蔵したりするのに役立った。このほかこの時代には，狩猟に用いる弓矢もつくられ，けものの角や歯牙，あるいは魚の骨などに加工した釣針，針なども工夫され，漁法の技術も進んだ。

いまから五千年ぐらい以前のころになると，さらに革命的なこととして，自然のなかにある金属（銅，錫）を用いた金属器がつくられた。はじめは銅

金属を利用した銅器だけであったが，やがて銅に錫を混入して，銅よりも堅い青銅器の鋳造に成功した。金属を用いてつくった道具には，武器では銅剣（短剣），鉾（槍先）あるいは戈や鏃，農具には犂先，楽器ともいうべきものには銅鐸，このほか容器や鏡，腕輪などがあった。その後かれらはさらに鉄金属を発見し，青銅器よりももっとすぐれた鉄器をつくった。鉄器には鉄斧や鎌，やりかんなや鍬先などの農具，このほか鉄刀や鉄戈などの武器もあった。さらにいっそう時代が進み，14～15世紀ごろになると，西欧では自然科学が勃興し，自然についての研究が発達し，科学的知識を利用した多くの道具や機械がつくられた。これらの道具や機械を用いて，さらに便利な生活用具や道具がつくられたことはいうまでもない。物質文化はこのように，自然のなかにある物質に手を加え，工夫してつくり出された自然のままではないもののことであるが，それを用いていとなまれるひとの生活も，また文化の一様態である事実に変わりはない。

**㈡精神文化**　ひとは自然のなかにあるもの（物質）にはたらきかけ，手を加えて工作し，自然のままではないもの（道具）をつくり，それを役立てて少しづつ生活を変えてきた。こうしてひとがけものの域から人間の段階に近づくにしたがい，生活にゆとりが生まれ，理性が芽生え，自然や人間自身に対しても目を向けるようになり，自然とは何か，人間とは何かについて問い返えすまでになった。精神文化はこうしたひとの内面本性の特質，人間本性を基礎に発祥した。このように考えると精神文化は，自然や人間の本質を見つめ，問い返えし，追求しないではいられない人間の自然本性をもとに，生み出され，つくり出された価値やもの，例えば学問や道徳，あるいは芸術や宗教ということになる。

このうちまず学問の場合についてみると，学問はすでに古く，古代エジプトやギリシャにおいて始められていた。例えば幾何学の Eukleides や Pythagoras，哲学の platon（B．C．420-347）や Aristoteles（B．C．384-322）を知らないものはない。近世に至ると学問はいっそう進み，自然科学（na-

tural sciences)，社会科学 (social sciences)，人文科学 (human sciences) などの諸科学が急速に勃興した。自然科学の方面では，Copernicus (1473-1543) が地動説を唱えたのをはじめ，イタリヤの Galilei (1564—1642) は，ピサの斜塔で落体の法則の実験をしている。またイギリスの物理学者で，天文学者であった Newton (1642—1727) は，天体をはじめいろいろな科学の法則を発見し，自然科学の基礎を確実にした。化学の方面でも，Boyle (1627—91) を経て，Lavoisier (1743—94) に至ると，中世的な錬金術の域を脱して，学問としての化学の基礎を確立している。Lavoisier は，燃焼現象は燃素と物質との化合の結果であるとみた旧説を覆えし，空気中の酸素の働きであると説えたことはよく知られている。

以上このような自然科学の発達とともに，また社会科学の研究もすすみ，Adam Smith (1723—90) は，ひとの経済生活を経験的に観察し，理論的に解明する学問としての経済学を創始した。フランスの社会学者 Comto (1798—1857) は，ひとの社会生活を実証的に研究する社会学の創始者となり，ドイツの経済学者 Marx (1818—83) は，唯物論の立場から Hegel (1770—1831) の弁証法 (dialectic) を学び，またイギリスの経済学の研究も深めている。かれの著書「資本論」(Das Kapital) は，今日でもなお大きな影響力をもっている。このほか，哲学，文学，歴史のような，人間自身を研究し，究明しようとする人文諸科学も急速に進歩しはじめた。今日では以上の学問分野のうち，自然科学系領域では例えば数学，物理学，化学，地理学，生理学，人類学，天文学などの方面があり，人文科学系分野では哲学，倫理学，心理学，教育学，歴史学，人文地理学，文学などの諸方面がある。また社会科学関係方面では法学，政治学，経済学，社会学，統計学，家政学などの諸領域がある。

ひとは以上のような学問分野を通して，真理を追い求める傾向をもっているだけでなく，他方では美しいものに憧れ，それを創作したり，表現したりする芸術に向う本性 (美性)，自然の傾向をもっている。ひとがこのよ

うな傾向を本性(自然)としてもっていることは，ひとが美しい絵画や彫刻を見たり，音楽を聴いて感動し，すぐれた文学書等を読んで深く心を打たれる事実にてらしてみてもわかる。美しいものを追い求め，美しいものを創り出し，これを楽しもうとする傾向(芸術性)は，すでに古く原始時代にもみられる。例えばスペインのアルタミラ(Altamira)の洞穴から発見された，原始人の描き残した洞窟壁画もその一つである。それはいまから約一万五千年も以前のものといわれ，洞窟内壁には，牛や馬などが生きいきと彩られ描かれている。前出同書「人類の祖先」所収「地下の画廊」は，以上このような洞窟壁画の模様をあらましつぎのように紹介している。

フランスとスペインの洞穴の壁を飾っているすばらしい色彩の絵は，世界最古の芸術である旧石器時代の遺跡の中でももっともすばらしくもっとも価値あるものである。これらのあるものは実に偉大な芸術作品で，いくつかの洞穴はまさに先史時代の画廊といってよい。スペインのアルタミラ洞穴，フランスのフォン・ド・ゴーム，ニョー，ラスコー洞穴の四つがそれであろう。後期旧石器時代（おもにマグダレニアン期）の芸術家は非常な困難のもとで製作をした。石のランプのゆらゆらするうす暗い明りかたいまつのほのほをたよりに，ほとんどとどかないくらいの高さの壁に背のびして，あるいはまたかがみこんだりあおむけになって低い通路の天井に，絵を描いたのである。彼の用いた絵具はすべて鉱物質――色のついた土であって，いくつかの洞穴では今日までその絵具が残されている。それはいろいろの大きさの塊りで，重さは数ポンドにも達するものであった。かたまりがこなごなに砕けて色のついた泥になっているものもあった。ときにはこの絵具が棒状のクレヨンになって発見されたものもあるが，これは最古のクレヨンともいえよう。絵を描くときには，画家はこの粘土のかたまりを砕いて細かな泥をとり，それを動物の脂肪でまぜて用いることになっていた。動物の肩甲骨または平らな石がパレットの役をした。彼が指で描いたか，木の小枝を使ったか，あるいは動物や鳥の毛を用いた一種のブラッシを用いて描いたかどうかはわれわれにはわからない。洞穴の壁画は何世代もかかった仕事であり，あるいはまたいくつかの種族の制作のつみ重ねであったかもしれない。そのようなときは，種族でもっとも才能のあるものがもっとも立派な画を残したのであろう。そこにはすでに芸術「学校」があって絵の技術をマスターしたばかりでなく，これまでの伝統を引継ぎそれを自分自身の絵の趣意にあわせて使っていくような生徒をつくっていたことが暗示されている。とくに興味深い一つの疑問についてのべよう。そ

れは，この壁画が小さな規模でつくられている，いいかえれば同じものが石や骨に彫られている実例が沢山あるのである。これは大きな壁画のためのスケッチなのだろうか，それとも実際の壁画をうつしたものなのだろうか？　これはどちらともいい難い。とくにフォン・ド・ゴームの洞穴から約400kmもはなれたところから，アメリカヤギュウの彫刻が発見されたが，それと全く同じ絵がこの洞穴の中にあるというように，壁画に描かれたものと，同じ絵とが遠くはなれたところから発見されているのである。壁画の絵の数は洞穴によってまちまちであり，中には数百にのぼるものもある。その大きさもまたまちまちである。たとえばラスコー洞穴のアメリカヤギュウの絵は1m70cmであり，そのすぐ下には小さなウマの絵を描くというようなものであった。

いずれにしても芸術は，ひとに内在する美なるものに向う傾向（美性）が，具体的な形をとって開花結実したものといえる。その具体的なあらわれは，創作や表現活動の方法の違いによって，異なる形をとってあらわれてくる。例えば文字によって表現される場合には文芸となり，音による場合には音楽となる。線や色彩であらわせば絵画，形や線を用いれば彫刻や工芸，身体的な活動で表現した場合には演劇や舞踊になる。このようにみてくると，芸術はひとのなかの自然（美性）にはたらきかけ，ひとの自然本性から美感覚をひき出し，それぞれの創作や表現活動を通して具象化したものであるということができる。

ひとは以上のように，学問によって真理を求め，芸術によって美に憧れ，また他方では神聖なもの，崇高なもの，純潔なもの，永遠なもの，いいかえれば本源的なもの，神に向う傾向をもっている。宗教はこのような，ひとのなかにある自然本性が，神聖，崇高，醇正，完全なもの，すなわち本源的な神に向う傾向を基礎に生まれた。その具体的なあらわれは，価値としての宗教や，既成宗派宗教，あるいは民族宗教など様々であるが，釈迦（Buddha）によって説かれた仏教，イエス（Jesus Christ）によって広められたキリスト教，マホメット（Mahomet）によって始められた回教は，いずれも世界の三大宗教として，民族や国境の別をこえ，今日でも広く信者をもち，世界の多くのひとびとの信仰のまととなっている。宗教はこうし

て，ひとびとの神に向う自然本性（宗教性）を基礎に，ひとの内なる要求を満たし，心の拠りどころともなり，老病死苦の悩みにこたえて，ひとの慰安尉藉の泉源となってきた。このような宗教が，精神文化の一領域を形成することはいうまでもない。

㈢**制度的文化**　ひとは自然界の動物の一員であるとともに，またすでに古く Aristoteles も指摘しているように，社会的動物である。事実，ひとは社会から孤立しては，生存することも生活をいとなむこともできなくなる。社会はひとが二人集まればできる。いったん社会ができると，その社会を維持発展させ，滞りなく社会生活を続けていくうえでの規範，準拠が必要になる。もしそのような規範，準拠がなく，ひとびとが互いに好き勝手に行動すれば，社会の発展維持はもちろん，生活すること自体不可能になる。制度的文化は，社会の維持発展をはかり，社会生活をいとなむうえで必要なひとの行動，考え方，感じ方などの規範，準拠ともいうべき道徳，法律，慣習，習俗などのことである。

道徳はひとのなかにある自然（善性）が，悪をさけて善に向う傾向にあることを基礎に，社会生活をいとなむうえで必要なひとびとの行動の諸規範，準拠となるものである。Kant（1724—1804）はひとの尊厳は人格にあるとして，人格主義（Personalism）の道徳思想を確立したことで知られている。かれによればひとは本性として理性と感覚的欲望をもっているが，道徳的法則や規範にしたがって，欲望を克服するところに人格の尊さがあるとしている。しかしこのような法則や規範は，外部からおしつけられるべきものではなく，ひとが自然の傾向としてもつ理性のうえに，自覚的になされるべきはずのものである。この自ら確立した道徳，規範に自覚的にしたがうことが自律であり，人格とはこのような自律的能力をもつひとのことであると説いている。かれの著書「実践理性批判」（Kritik der praktischen vernunft，波多野精一訳）により，かれの道徳法則，あるいはその基礎である人格についての所見を引用すればつぎのようになる。

意志が自由であることを前提して，それのみが意志を必然的に規定するにたるところの法則を見いだせ。なんじの意志の格率がつねに同時に普遍的立法の原理として妥当しうるように行為せよ。それを考えることしばしばにしてかつ長ければ長きほどつねに新たにして増してくる感歎と崇敬とをもって心をみたすものが二つある。それはわが上なる星の輝く空とわが内なる道徳律とである。道徳律は神聖である。人間はなるほど非神聖ではある。しかしかれの人格に存する人間性は，かれに対して神聖であらねばならない。全宇宙において人の欲し，また人の支配しうる一切のものは，たんに手段として用いられ得る。ただ人間およびかれとともにあらゆる理性的存在者は目的そのものである。すなわち，かれはかれの自由の自律のゆえに神聖なる道徳律の主体である。……ゆえに，この主体はけっしてたんに手段として用いられるべきではなく，それ自身目的として用いられなければならない。

法律もまたひとの行為規範として，社会統制や秩序維持に，大きな役割と意味をもっている。このような法律は，道徳が内面性 (innerlichkeit) の規範であるのに対して，外面性(äusserlichkeit) を規定する外面規範としての特色をもっている。外面規範というのは，上述の道徳における内面規範とは異なって，外部にあらわれた行為を制約する規範であるという意味である。いいかえれば，道徳規範の場合には，ひとの内面，すなわち心のなかで，正しい動機によって行為しているかどうかが問題となるが，法律では外部の実行行為が問題にされるということである。例えば道徳においては，ひとのものを盗まなくても，絶えず欲しいと思っており，ひとに見つからなければ盗もうと考えただけでも許されないが，法律では少しも違法とはならない。道徳ではひとの内面的動機をも問題にし，法律では外面的実行行為を問題にするからである。このほか道徳と法律の違いは，道徳には強制力がないが，法律には強制力がともなうということである。道徳の本質は自分の内心（理性）にしたがって行為するというところにあり，強制とは相容れないが，法律は強制力を用いて法律を守らせ，守らない場合には刑罰を科して拘束するという特徴をもっている。いずれにしても法律は外面規範として，強制拘束力をもつ行為規範であるというところに大きな力と意味がある。このような法律がひとの生活のなかで，制度的文化の

一方面を形づくることはいうまでもない。

以上このように道徳も法律も，ひとの行為規範として，大きな影響力をもっているが，習俗や習慣も，また生活のなかで支配的な力をもつ生活規範ということができる。事実，習俗や習慣は長いひとの歴史のなかで，生き残りうけ継がれてきたものだけに，目立たないが日常的に，底深い影響力をもっている。習俗，習慣が生活のなかで，大きな支配拘束力をもっていることは，世上しばしば言い古されている諺の例をみてもわかる。例えば「郷に入っては郷に従え」というのがある。これは習俗，習慣はその地方によって異なるから，上手に生活しようと思ったら，その地方の習俗にしたがうことが第一であるという意味である。このほか「里に入りては里に従え」とか，「国に入ってはまず禁を問え」，あるいは「人の踊る時は踊れ」，「習慣はところの数だけある」，「所変われば品変わる」なども，いずれも同じ意味の諺である。西洋にも「ローマではローマ人の如く生きよ」(when in Rome do as the Romans do.) とあり，どこへ行っても，「所の法には矢が立たない」というのが常識なのである。このようにみてくると，習俗や習慣は，道徳と同じではないが，そのなかに慣行としての生活規範をふくみ，法律と同じではないが，生活律としての支配拘束力をもっていることがわかる。その具体的なあらわれは，地方や地域により，あるいは民族や国家の別によっても異なるが，ひとのいるところ，いつでもどこでも，生活の規範として，制度的な形をとってあらわれてくる。このような習俗習慣が，制度的文化の一方面を形づくることはいうまでもない。

### (3) 形成的環境—文化

**(一)文化の形成力**　自然環境がひとの形成に影響力をもち，社会が人間を同化するように，文化もまたひとの重要な形成的環境となる。ひとがけものの域を脱して，ひとの段階にまで進化できたのも，文化のはかり知れない恵沢によっている。このようなひとも，しかしすでに述べたように，かつ

て人類の太古の時代においては，文化のひとかけらすらない，野蛮未開の生活をしていたのである。かれらの生活はまず第一に生きること，生命の存続と維持に向けられていた。食べることや飲むこと，眠ることや休息すること，呼吸することや排泄すること，手足を働かせて動きまわることだけが，かれらの生活のすべてであった。Sigerist (1891—) はこのようなかれらの生活を「文明と病気」(Civilization and Disease, 松藤元訳) のなかで，「文明は非常に年若い。五十万年間，人間は体は毛で覆われ，食物を探し廻り，洞くつのなかで眠り，森林のなかで野獣のような生活をしていた」と述べている。

こうしたかれらも時代が進むにつれ，自然に工作して道具をつくり，火を発見してこれに親しみ，言葉を生み出して意志の疏通に役立てることをおぼえた。かれらはこうして道具の文化を手に入れ，火の文化を導きの灯にし，言葉の文化を武器として，けものの生活と別れを告げた。事実，ひとは道具をつくり，道具を用いる動物であるといわれているが，かれらは道具の文化を手にし，それを使ってますますけものの生活から遠のくことができたのである。ひとは火を使う動物であるといわれているが，かれらは火の文化を手にすることによって，いっそうひとの生活にまで近づくことが可能になったのである。かれらはまたひと特有の言葉を生み出し，言葉の文化を身につけて，さらにいっそう人間にまで進化したのである。道具や火や言葉は，いずれも文化そのものである。これらの文化は，かれらの生活をつくり変えただけでなく，かれら自身をも変え，けものの域から人間の段階にまで導いた。文化が影響力をもち，かれらを形成陶冶した結果である。もしかれらに文化がなく，文化がかれらを人間にまで形成することがなかったら，今日もなおひとは依然として，太古の野蛮未開のけもの同然の生活をしていたはずである。このようなかれらを人間にまで形成した文化，すなわち道具や火や言葉の役割について，「人類の特徴」(「玉川大百科辞典」所収) の項によって参照するとつぎのようになる。

(1) **道具**　サルが進化して人類になるには，自然条件の変化も重要なはたらきをなしているが，特に道具の製作，火の利用，言語の使用が決定的な重要さをもっている。道具をつくるかいなかということが，サルと人類の境目であるといってよい。一部の類人猿は，自然界に存在する石や木を使って食物を手にいれることがあるが，たとえいかに簡単なものでも，石や木に加工してそれを道具として使用するのは，人類のみがもつ能力である。そして，道具をつくったり使ったりするには，前足すなわち手を自由に使わなければならない。直立することによって，四つ足で歩く姿勢よりもはるかに重い脳をささえることができるので，脳の発達をうながし，また道具製作のくふうによって知力が発達していった。(2) **火**　はじめは火山や落雷や樹木の摩擦による自然火を見て，ただおそれていた人間は，それを偶然の機会に使って，保温や調理や照明に役だつことを知り，やがて木や石をすりあわせて火をつくるようになった。火の使用によって生活はにわかに進歩したから，太古の人間は火を尊敬し，これを神聖なものと考えた。これはやがて古代宗教における聖火の観念を生み出し，今日の多くの宗教のなかにもそのなごりをとどめている。(3) **言語**　言語を知っている人間は，ことばを口に出して話さないときでも，心のなかで言語を使っているものである。心のなかでことばを使わずに物事を考えようとしても，複雑なことは何も考えることができないものである。このことは，言語の使用が人類の発達の上で，どんなにたいせつなものであるかということを証拠だてている。このほか，人から人への意志を伝達することも，言語のおかげであり，それによって知識経験が蓄積されて人類の知識の発達をもたらしたのである。言語の発明は先史時代の初期におこなわれ，文字の発明によって，書かれた記録が生れるようになって，先史時代は終るのである。

このようにみてくると，文化を生み出したのはもともとひとであるが，ひとはまた自らつくり出した文化の恵沢によって，逆にますます人間にまで形成されてきたことがわかる。いいかえればひとをはなれて文化はないが，文化をはなれた人間もまたないということである。文化をはなれて，ひとが仮りに生物学的生命を維持できたとしても，人間的生命を生きたことにはならないのである。文化はこの意味でみれば，人間を形成薫化する父以上の父であり，母以上の母であるということができる。前出 Chauchard 著「人間の生物学」が，「人類では進歩は文化的なものになった」と述べているのも，以上と同じ趣旨の指摘といえる。今日ひとをとりまく文化的環境は，複雑多岐できわめて多様化している。物質文化や精神文化，

あるいは制度的文化はいうまでもなく，これら文化の側面を複合した生活文化というべきものも，日常われわれの身のまわりに氾濫している。文化が人間の形成力として，きわめて重要な形成的環境を形づくっていることは，例えば文化的環境の一方面である書物の影響，芸術の薫成，宗教の触発力についてみてもわかる。

**(二)書物の影響** ひとは誰でも，かつて自分に影響をあたえ，また現にあたえつつある本の一冊か，二冊はもっているものである。子供も同じであって，いまの生活のなかで興味をそそられ，身近かに親しんでいる書物をもっている。本（書物）は文化そのものであり，知的遺産の集積である。事実，本のなかには，あらゆる方面の知的遺産が凝集されている。思想，文学，芸術，宗教についてはいうまでもなく，政治，経済，法律，教育，歴史，地理，社会，科学，技術など，およそひとの知的生産にかかわる人文，社会，自然の各方面をふくんでいる。

今日では印刷技術が進歩し，また情報化社会の趨勢を反映して，書籍など出版物の総量は年毎に増大している。書物の出版発行数は文化のバロメーターであり，知的エネルギーの指標でもある。そのなかには出版と同時に，読み棄てられるものも少くないが，またひとにとって，忘れられない本，私の一冊の書物となるものもふくまれている。青年期の精神的支柱となり，生きる知慧の泉源となるものもある。老病死苦の時の慰藉となり，生への勇気をあたえ，宗教にまで導くものもある。人生観を変え，生き方や考え方，あるいは感じ方や行動の仕方に影響をあたえるものもふくまれている。もしこの一冊の書物，あるいはそのなかの一節，または一行の文章に出会わなかったら，今日の自分はなかったと思われるものもある。このような書物との出会いは，ひとによってきわめて個別的，個性的，特殊的である。私の一冊の書物，あるいは忘れられない本との出会いは，このようにひとによって異なり，その書物の種類も方面も多様ですべての分野にわたっている。事実，あるひとにとっては文学の書物が一冊の本となり，

あるひとにとっては思想の方面の書物が忘れられない本となる。またあるひとには科学書の一冊が座右の書物となり，あるひとには宗教書が生き方の原則を付与する一冊となる。そのことは例えば「忘れられない本」(朝日新聞社刊) 所収，つぎの九十五人のあげた書名に照合してもわかる。

(1)菊池寛著「啓吉物語」(松本清張) (2)M・ハイデッガー著「存在と時間」(梅原猛) (3)B・ケラーマン著「トンネル」(手塚治虫) (4)R・アードレィ著「アフリカ創世紀」(両角良彦) (5)広津・宇野・葛西らのばら売り全集 (水上勉) (6)ハッチンリン著「忘れられない捕虜」(植草甚一) (7)消えてしまった「有史以前のお話」(松居直) (8)徳富蘆花著「自然と人生」(東山魁夷) (9)W・オスラー著「平静」(日野重明) (10)釈迢空「死者の書」(篠田桃紅) (11)石濤著「苦瓜和尚画語録」(加藤楸邨) (12)親鸞「歎異抄」(遠山啓) (13)菊池寛著「真珠夫人」(米倉斉加年) (14)「太平記」と「殉難叫血録」(前尾繁三郎) (15)上原専禄著「死者・生者一日蓮認識への発想と視点」(真壁仁) (16)今西錦司著「人間以前の社会」(河合雅雄) (17)黒田亮著「勘の研究」「続勘の研究」(川上哲治) (18)鈴木三重吉作「ボビイとボン」「ぽっぽのお手帳」(松谷みよ子) (19)ノビコフ・プリボイ著「バルチック艦隊の遠征」「バルチック艦隊の潰滅」(福田定良) (20)十字屋版「宮澤賢治全集」第三巻(林　光) (21)幸田露伴著「五重塔」(清岡卓行) (22)永井荷風著「墨東綺譚」(小沢昭一) (23)カール・ヒルティ著「幸福論」第一部 (藤林益三) (24)宮澤賢治著「どんぐりと山猫」(井上ひさし) (25)「九相詩絵巻」「餓鬼草紙」「地獄草紙」(丸木俊) (26)山田宗睦著「花の文化史」(前川文夫) (27)森鷗外作「妄想」(吉野俊彦) (28)陸羯南編「愚庵遺稿」(島本久恵) (29)タゴール著「サダナ」(鶴見俊輔) (30)J・ミルトン著「言論と自由」(美作太郎) (31)上村忠治著「詩人を通じての支那文化」吉川・小川編集・校閲「中国詩人選集」(加太こうじ) (32)F・レーリヒ著「中世ヨーロッパ都市と市民文化」(高村象平) (33)志賀直哉作「小僧の神様」(高峰秀子) (34)書肆ユリイカ刊「ロートレアモン全集」(真鍋博) (35)野坂昭如著「エロ事師たち」(富岡多恵子) (36)新井石禅著「般若心経講話」(大城立裕) (37)鈴木虎雄訳解「玉台新詠集」(益田勝実) (38)N・A・バイコフ著「偉大なる王」(戸川幸夫) (39)C・ヒルティ著「眠られぬ夜のために」(横尾忠則) (40)芭蕉聞書「去来抄・三冊子・旅寝論」(山口誓子) (41)ツィルゼル著・青木靖三訳「科学と社会」(中岡哲郎) (42)「千一夜物語」(中里恒子) (43)正岡子規作「歌よみに与ふる書」(井出一太郎) (44)D・モリス著「裸のサル」(中川志郎) (45)クルト・ザックス著「比較音楽学」(一柳　慧) (46)斎藤茂吉著「万葉秀歌」(田丸秀治) (47)「聖者ダミアン」(小林提樹) (48)夏目漱石著「吾輩は猫である」(足立巻一) (49)P・スミス著「アメリカ史のなかの女性」(山川菊栄) (50)ランボオ著「ポエジイ」(宗左近) (51)ヴォルテール著「カンディード」(大島清)

(52)岡倉覚三著「茶の本」(馬場あき子)　(53)木下順二作「夕鶴」(西谷能雄)　(54)アラン著「精神と情熱に関する八十一章」(池波正太郎)　(56)高群逸枝全詩集「日月の上に」(石牟礼道子)　(56)高倉輝著「印度童話集」(大岡信)　(57)クーリッジ作「ケーティ」(澤地久枝)　(58)谷口雅春著「無門関解釈」(稲生平八)　(59)菊池寛作「蘭学事始」(山田風太郎)　(60)荒木繁・山本吉左右編注「説経節」(野村万作)　(61)板倉鞆音訳・リンゲルナッツ詩集「運河の岸辺」(入沢康夫)　(62)カーティス・ケイト著「空を耕すひと」(上・下)(斎藤茂太)　(63)梶井基次郎著「檸檬」(宮城まり子)　(64)張俊河著「石枕」(青地　晨)　(65)島木健作著「生活の探求」(若月俊一)　(66)西脇順三郎「Ambarvalia」(田村隆一)　(67)「ウォルタア・ペイタア短篇集」(中村真一郎)　(68)李宗吾著・葉室早生訳「厚黒学」(伊藤ていじ)　(69)現代日本文学大系「柳田国男集」(山田洋次)　(70)K・ローレンツ著「ソロモンの指環」(日高敏隆)　(71)河出書房版「日本現代詩大系」(高階秀爾)　(72)富士正晴著「贋・久坂葉子伝」(安田　武)　(73)トルストイ著「戦争と平和」(岡田嘉子)　(74)柳田国男著「女性と民間伝承」(戸井田道三)　(75)H・F・オズボーン著「旧石器時代の人類」(井尻正二)　(76)斎藤茂吉著「短歌写生の説」(近藤芳美)　(77)柳田国男著「先祖の話」(神島二郎)　(78)「高木八尺著作集」第四巻(松本重治)　(79)チェーホフ著「六号室」(松田道雄)　(80)青木正児著「支那文芸論叢」(目加田誠)　(81)笠信太郎著「なくてななくせ」(今井田勲)　(82)J・H・ファーブル著「昆虫記」(大庭みな子)　(83)ルソー著「エミール」(林　寿郎)　(84)「兼常清佐遺作集」(柴田南雄)　(85)川村多実一著「鳥の歌の科学」(宮地伝三郎)　(86)ヴァレリー著「テスト氏」堀内正和)　(87)ホップズ著「リヴァイアサン」(永井道雄)　(88)ペイター著「ルネサンス」(篠田一士)　(89)片山敏彦著「心の遍歴」(加藤九祚)　(90)北条民雄著「いのちの初夜」(福永武彦)　(91)シュレーディンガー著「生命とは何か」(近藤宗平)　(92)松岡譲著「敦煌物語」(井上靖)　(93)島崎藤村「エトランゼェ」(河盛好蔵)　(94)B・フランクリン著「自叙伝」(都留重人)　(95)佐藤春夫著「西班牙犬の家」(大岡昇平)

以上このように誰にでも個人として私の一冊の本，忘れられない書物があるように，民族にも民族の一冊の本となるべきものがある。それは民族の歴史のなかで生き残った古典である。古典は民族の知的文化の遺産であり，民族の心を培う泉源となるべきものである。すぐれた民族は，すぐれた古典を数多くもっている。すぐれた古典をもっている民族が，すぐれた民族であるということもできる。紀田順一郎著「日本の書物」は，古典とは「広い時空のなかで過去にくり返し読まれ，ふだんに再発見されてきた

書物」であると定義し，「古事記」から江戸末期の「航米日録」まで，つぎのようなわが国の代表的古典82編を，作者の生涯や伝承にまつわるエピソードをもまじえて簡潔に紹介している。

**(1) 古代** (1)太古のロマン「古事記」 (2)古代人の哀歓「風土記」 (3)古代史の虚実「日本書紀」 (4)もう一つの日本「万葉集」 (5)古譚の宝庫「日本霊異記」 (6)天女幻想「竹取物語」 (7)天地を動かす歌「古今和歌集」 (8)王朝の色好み「伊勢物語」 (9)古代の船旅「土佐日記」 (10)反徒の墓碑銘「将門記」 (11)誇り高き才女「枕草子」 (12)恋多き女「和泉式部日記」 (13)後宮の光と影「源氏物語」 (14)女性愛書家の生涯「更級日記」 (15)栄華の軌跡「大鏡」 (16)平安流行歌「梁塵秘抄」 (17)王朝人のいぶき「堤中納物語」 (18)王朝のアニマル「今昔物語」 (19)悩み多き聖のうた「山家集」 **(2) 中世** (1)小さな巨編「方丈記」 (2)貴族の挽歌「平家物語」 (3)無垢の歌「金槐和歌集」 (4)妖艶のうた「小倉百人一首」 (5)覇者の交替「吾妻鏡」 (6)老母の執念「十六夜日記」 (7)山は是れ山「正法眼蔵」 (8)悪人の慰め「歎異鈔」 (9)神風と恩賞「蒙古襲来絵巻」 (10)鎌倉一代女「とはずがたり」 (11)乱世の孤独「徒然草」 (12)逆流の孤独「神皇正統記」 (13)人生の四季「菟玖波集」 (14)悪党の肖像「太平記」 (15)怨念の書「曾我物語」 (16)判官びいき「義経記」 (17)芸道一代「風姿花伝」 (18)禅と風流「狂雲集」 (19)覇者の条件「早雲寺殿廿一箇条」 (20)乱世庶民の夢「御伽草子」 (21)南北朝の庶民像「狂言記」 **(3) 近世** (1)人は石垣「甲陽軍鑑」 (2)野放図な哄笑「昨日は今日の物語」 (3)異教徒の置土産「伊曾保物語」 (4)天地を破る「五輪書」 (5)野暮と若衆「田夫物語」 (6)万骨の誇り「雑兵物語」 (7)元禄の英雄「好色一代男」 (8)風雅のこころ「おくのほそ道」 (9)愛の逃避行「曾根崎心中」 (10)死物狂いの人生「葉隠」 (11)何んのために生きる「養生訓」 (12)最古の自叙伝「折たく柴の記」 (13)義理一遍「仮名手本忠臣蔵」 (14)江戸のマルクス「自然真営道」 (15)虚構の賢臣「日暮視」 (16)おどけ咄「風流志道軒伝」 (17)永遠の庶民像「柳多留」 (18)江戸のエクソシスト「雨月物語」 (19)春怨思慕「蕪村句集」 (20)滑稽のうた「徳和歌後万載集」 (21)死にたくもなし「海国兵談」 (22)緩慢なる毒「玉くしげ」 (23)心ある人の旅「東遊雑記」 (24)反説教「孔子縞于藍染」 (25)風狂の人生「近世畸人伝」 (26)鎖国の悲劇「北槎聞略」 (27)男の解放区「東海道中膝栗毛」 (28)庶民のサロン「浮世風呂」 (29)勧喜懲悪「南総里見八犬伝」 (30)窓を開いた人々「蘭学事始」 (31)ふるさとへの執念「おらが春」 (32)桜の板木は残った「群書類従」 (33)明鏡のこころ「夢ノ代」 (34)江戸の笑劇「花暦八笑人」 (35)生への執念「東海道四谷怪談」 (36)太平の牢獄「日本外史」 (37)夜明け前の苦悩「慎機論」 (38)情緒纏綿「春色梅児誉美」 (39)北国の情念「北越雪譜」 (40)近世の夕映え「江戸名所図会」 (41)八百八町の表裏「江戸繁昌記」 (42)近代への架け橋「航米日録」

いずれにしても書物は精神文化の結晶であり宝庫であるが，このような本との出会いは，すでに述べたようにひとによって異なり，時に運命的とすら思われることがある。例えばあるひとには，新聞の新刊図書の広告を見たことが機会となり，また他のひとには，古本屋の書架で，偶然手にした本が，私と一冊の書物との邂逅となるということもある。また友人や教師の影響に刺戟され，一冊の書物に恵まれることもあれば，両親や兄弟の書物に触れて，生涯忘れられない本に出会うということもめずらしくない。池田弥三郎は以上このような本との出会い，結縁について，「私の読書術」（朝日新聞所収）のなかでその体験をつぎのように述べている。

今まで一冊の本というような課題で執筆を求められたときには，わたしは多く，折口信夫，もしくは柳田国男の著書を採り上げてきた。事実，両先生の著書は，どれを採り上げても，愛読書という以上に深く，わたしにとって忘れ得ぬ本であった。しかし，今になって考えてみると，両先生の著書との結縁の始まりは，わたし自身の捜索，選択ではなく，わたしに先立って，わたしの父の捜索，選択があった。わたしはそれらを書店の棚（たな）や図書館で発見したのではなくて，それらはまず父の蔵書の一部として，気がついたら，わたしの身近にあった，という出会いであった。「後狩詞記」も「遠野物語」も，あるいは「古代研究」も，それらはまず父の所有物であった。

それではそれ以前に遡（さかのぼ）ったら，そこにどのような本があったか。正直に言って，少年期のややましな読書歴というものは，意外に学校の教科書がきっかけをなしていることが多いように思う。しかし少年期のむなしい反抗が，教材であったがために拒否するという不幸を生まなかったとは言えない。それは一般の傾向として，あったと言えるかも知れない。けれどもわたしの場合は文学少年らしい反発よりは，それらを素直に受け入れるという方向をとった。従って，柳田・折口両先生の著書以前のわたしの読書歴に並んでいる書物は，少年期の，具体的には旧制中学の国語の教科書の中に還元してしまうものが多い。ある時期，わたしはそれがあまりに平凡で月並みな書物との出会いというわけで，誇らしく口外することを，恥ずかしく思ったりしていたが，今はそうは考えない，漱石，鷗外に始まる近代文学作品の選択は，わたしの場合，中学の国語の教科書がきっかけになっているわけで，蘆花も花袋も，芥川も志賀も，結局，国語の教科書の中に，還没してしまうのが，わたしの読書歴であったと言える。ただ，サンプルのような国語の教科書の教材から，わたしなりの興味の偏向が生じて，教科書のそとに出て行って，同じ著者のほかの作品を読書の対象に採り入れていったとこ

ろに，わたしなりの本との出会いが始まったと言えるだろう。そして意外なことに，その選択は，やがて柳田，折口両先生の学問に魅せられていく素地を，わたしにあって形成していったように思う。そしてそういうことに気がついたのは，柳田，折口両先生とお別れして，20年余りの歳月が過ぎてからのことであった。

たとえば，まだどういう方向に進むのか，漠（ばく）然と東京のナンバー・スクールにいたから，どの道旧制高等学校にでも行くものと思っていた時分，すでにわたしの読書の興味は，旅行記と地誌・風土記的記述に傾いていた。蘆花では「みみずのたわごと」，「死の蔭に」，花袋では「東京の30年」，「時は過ぎ行く」などに深い興味を覚えさせられていた。「死の蔭に」などは，作者の宗教的な懊悩（おうのう）などにははいりこんでいかず，ただ，日本国内の旅行記としての興味に惹（ひ）かれていた。右に具体的に書名を挙げた著書を，わたしは久しく読み返していない。それは曾遊の地を訪れて，記憶の中の印象が，その現況のために無惨に壊されてしまう経験が，かつての読書の記憶についても警戒させるのかも知れない。しかし，たまに歳月を隔てて再読することになったとき，記憶の中に定着して動かしがたいものとなっていた文言の細部に，意外な相違があることを発見して，なんともいえぬさびしさを感じた経験は，なにもわたしばかりではあるまい。そして作者に関係のない，読者の理不尽な歪（わい）曲は，常に必ずしも原著者に対して失礼な曲解とばかりは言えないように思う。ドーデーの「パリの30年」のイミテーションだとしても，わたしにとっては，それは全く関係がない。読者としての昂奮（こうふん）と刺戟（げき）とは比較にもならない。そしてさらに言えば，読者としてのわたしには，「みみずのたわごと」や「時は過ぎゆく」があって，すでにそこには蘆花も花袋もいないのである。民俗誌といった著述の理想的なものは，れっきとした著者がいて，しかも読者の側には著者が隠顕しない，といったものかも知れない。まさしく「ひと，本に会う」ということかも知れぬ。

このようにひとと本との出会いは，ひとによって異なり千差万別であるが，いずれの場合にも，このような書物からうける影響感化力の大きさははかり知れない。そのことは前出引用の「忘れられない本」所収，つぎの「平静」（日野原重明）の場合についてみてもわかる。

昭和45年3月31日にハイジャックされた「よど号」に，私は乗り合わせた。「静かにしないと全員の命は保証しない。われわれは爆弾を持っている」というおどしの声が130余人の乗客の心のシンを貫いた。その瞬間，私の心にひらめいたのは「沈着」「平静」というW. オスラー（William Osler）の言葉であった。この言葉は，深い思想とともに，彼の名著「平静」（Aequenimitas）の冒頭の一

章に載せられている。アメリカ医学の開拓者オスラー博士（1849—1919）の医学生，看護婦，臨床医への講演集で，初版は1904年のものである。私が「よど号」の中で，赤軍学生から借りたドストエフスキーの「カラマゾフの兄弟」の一部を，足かけ4日の間，読める気持ちの安定を得たのは，この言葉の力による。オスラーは自分が創立に参与したジョンス・ホプキンス大学医学部を去るに際して，医学生に，患者から信頼される医師になるのに必要な，アラシの中にも不動の姿勢をとり平静に生きる道を説いた。オスラーは，ローマの名皇帝，かつ賢者として歴史に残るアントニヌス・ピウスが臨終に際して，人生哲学を「平静」の一語に要約したことを述べ，この世を去らんとする皇帝の態度は，「これから世に出んとする学生諸君にとっても同じく望ましい態度である。平静は成功の時にも，失敗の時にも等しく大切である」と言った。

「不動・沈着」はもともと天賦のものであるが，教育と訓練により獲得できる。また「平静」を得るのには，天賦も関係するが，友人との，また人生の仕事とのかかわり合いについて，けじめをつけた考えをもっていることが肝要であり，また交わる人々に余り多くを期待しないことも，心の安きを失わないための秘訣だと述べている。

この講演の結びに，その行く先の心配や，平静を乱して心を痛めることが度々あろう学生に対して，「かえって艱難こそが諸君を玉とみがく。完全な真理を求めても，それに達するは難く，真理の一説の断片をつかむのみで満足しなければならない」という行き届いた言葉を贈っている。

この本の第二版（1906）には，アメリカを去り，英国のオックスフォード大学に転任の際の，アメリカ・カナダの医学生の送別夕食会の席上の「わかれの辞」が加えられ，オスラーの人生哲学が要約されている。(1)，今日の仕事を精一杯にし，明日のことを思いわずらわない。(2)，医業の同僚や患者に，黄金律（すべての人々にせられんと思うことは，人にもまたそのごとくせよ——聖書）で行動する。(3)，平静の心。22の講演集の巻尾には，「医学生のためのベッドサイド・ライブラリー」と題して，新・旧約聖書のほかシェークスピア，モンテーニュなど9人の作家・思想家の本のリストを付している。その中の『医師の宗教』（トマス・ブラウン著，1642年初版）の1862年版を，オスラーは大学時代から座右に置き，これは，彼の葬いの日にはそのヒツギの上に置かれた。

私の生き方に原則とシステムを与えたこのオスラーの本が，私の34歳の時にどうして得られたか，を話そう。終戦の年の10月，幣原喜重郎氏が組閣の命を滞びると同時に肺炎で倒れ，当時の橋本寛敏聖路加国際病院長の命で，私は世田谷の私邸に往診した。さっそくマッカーサー元帥にペニシリンの譲与をお願いしたところ，私より少し年上のマッカーサー付きの軍医を私に同行させた。その帰途，私は彼にオスラーの原著入手の方法を尋ねたところ，翌日彼は，この本を私に届

けてくれた。サインがなかったので，私は彼の名をおぼえず，27年間が過ぎた。昭和47年にオスラーに関する私の随想「オスラーのアジアへの遍歴」がアメリカの学術雑誌に載せられ，その編集者G・テーラ教授は，私がこの本の前の持ち主を探しているという注を書いてくれた。これが橋渡しとなり，3，4人の人々との文通からついに探し人W・F・バウワーズという元外科教授に出会った。彼は私にオスラーとの出会いをさせてくれた恩人である。この本はそれ以来，オスラーにとっての『医師の宗教』のごとく，私の座右の書となっている。

**㈢芸術の薫成**　ひとはすでにみてきたように，人間の本性として，真なるものを求め，善なるものに近づき，美なるものに向う傾向をもっている。ひとが醜悪な色彩や形，騒音や喧噪を嫌悪し，美しいものを見たり聴いたりして快よさを感じるのは，このようなひとにひそむ，ひとの本性によっている。これをまたひとのなかの，芸術性といっても同じことである。芸術作品，すなわち絵画や彫刻，あるいは音楽や演劇，舞踊などは，いずれもこのようなひとのなかの本性（自然），いいかえれば芸術性が，具体的な形をとって，外部に噴泉したものとみることができる。以上このような芸術は，ひとの自然本性（芸術性）とのかかわりのなかで，教育上二つの重要な方面をもっている。第一は，芸術作品の鑑賞を通して，ひとの本性にひそむ芸術性を刺戟し，いっそうますます深化薫成するという方面であり，第二は，芸術作品の創造や創作，あるいは表現するなどの創出活動の方面である。

第一の芸術作品の鑑賞による教育上の意義は，以上述べたひとにひそむ本性，美に向う傾向（芸術性）を，いっそう深化培養するという点にある。事実，美しい絵画や彫刻はひとを魅了する。すぐれた音楽の旋律は，ひとを感動共感の虜にする。感動的な演劇や舞踊は，ひとの魂を把えてはなさない。いずれもすぐれた芸術作品が，ひとのなかの芸術性を刺戟し，触発し，覚醒し，深化し，昂揚し，浄化し，培養薫成した結果である。ひとがこのように醜いものを避け，美しいものに憧憬する傾向のあることは，ひとがすでに原始古代の時代以来，無数の芸術作品を創出し，あるいはそれ

を用い，生活を楽しみ豊かにしてきた事実にてらしてもわかる。しかしこのようなひとに本具する美性（芸術性）も，そのままに放置したのでは，どんな豊かな土壌でも，手を加えなければ実のりが期待できないように，いたずらに荒廃枯涸するほかなくなる。そのことは例えば Aveyron の野生児の場合についてみてもよくわかる。この少年が発見されたのは，推定11～12歳のころのことであるが，外貌や外見がけもの同然であっただけでなく，美醜についての感覚もまったく麻痺していた。そのことはかれが，汚物に対しても不快感を示さず，また香水に対しても反応しなかった事実にてらしてもうなづける。このようにみてくると，美に向う傾向（芸術性）は，もともとひとの本性（自然）ではあるが，これを刺戟し，触発し，覚醒し，培養し，薫化するのでなければ，ついに洗練開花しないものであることがわかる。この意味でみればこれに刺戟をあたえ，覚醒し，触発し，培養し，薫化し，洗練深化し，開花をうながすのが外部からの教育，すなわちすぐれた芸術作品の鑑賞を通しての薫成ということになる。すぐれた芸術作品に触れて感動をおぼえ，心温まり，心情が興奮し，沈潜し，祈り，愛を感じ，平和を思い，純粋感情が昂揚することは，誰でもしばしば経験することである。そのことは，大竹省二（写真家）が「幸せなる大家族」（油絵）を見て，「フラゴナールの魅力」（読売新聞所収）として，つぎのように述べているのをみてもうなづける。

フラゴナールの絵の中に，私は躍動する動きの流れの美しさを感じた。たとえば，婦人像や子供たちの表情の一つ一つが生き生きとした動感を持っていて，ふと，絵の中に描かれている人物の視線と私の視線とが触れ合うことがあって，一瞬，戸惑うような錯覚さえあった。どの絵にも，現代のカメラアイを通じて撮られた動感よりも，より生々しく，繊細で，品のよいエロティシズムが横溢（おういつ）していて，この時代がいかに平和と豊かさに満ちあふれていたかを感じさせられた。そして，石油や電気の恩恵に浴さなかった時代の人々が，これほどまで生き生きと蘇生（そせい）していることに胸うたれた。それぞれの優しい目もとを見つめていると，私たちの持っている文明とはいったいなんだろうと考え込まされてしまう。省エネだとか，原子力だとか，文明があるが故に現代人は真の

平和を持つことができないでいる，との感じさえする。このフラゴナールは，そうした人の心の豊かさを改めて教えてくれているようだった。

芸術が教育上に占める第二の意義は，作品の制作，創造，表現などの，創出活動にともなう形成効果の側面である。ひとはすでにみてきたように，ひとの本性の自然として，美なるものに向う傾向，すなわち芸術性をそなえている。このようなひとの本性（芸術性）が，広い意味の文化，直接的には絵画や彫刻，あるいは音楽や演劇，舞踊などによって刺戟触発されたとき，ひとは絵画や彫刻が好きになり，音楽や演劇，舞踊に興味をそそられ，自分もまたそれを創出表現しないではいられなくなる。ひとのなかの芸術性が目覚め，揺り動かされ，昂揚し，噴泉した結果である。この意味でみれば，ひとは誰でも，いつでも芸術の創造，創出に向う傾向（美性）をもっているとみても当然ということになる。

しかし実際には，芸術作品の創出，表現にあたっては，高度の技術，技法が必要になる。絵が好きであるからといって，誰でもただちにすぐれた絵が描けるわけではない。絵を描くためには，デッサンの基本や，彩色についての素養を身につけていなければどうにもならない。彫刻に興味をそそられたからといって，ただちに像に刻むことができるわけではない。のみさばき一つ，素材の選択の仕方や，制作上の工夫にしても，年輪を重ねた技法の修練が必要になる。音楽の場合でも，音楽に対する情念が湧いたといっても，すぐに音楽作品が生み出されるわけではない。曲想を五線譜に写し，楽器や音声の表現を媒体にしなければ，音楽は成りたちようがない。演劇や舞踊についても同じことがいえる。演劇に感動し，舞踊の美しさに魅了されたとしても，それを自分で演じるには，激しい修練によってしか獲得されない技法の習得が必要になる。

このようにみてくると，ひとは誰でも芸術に向う傾向をそなえてはいるが，しかしそのことは，ただちに誰でも芸術家になれるということではない。この意味でいえば，芸術教育の目的は，子供を芸術家にすることでな

いことは明らかである。芸術教育の目的は，ひと（子供）にひそむ本性（芸術性）に着目し，これに刺戟をあたえ，培養し，触発し，醇化し，その噴泉をかき立て，興味を誘発し，作品の創出，表現をうながすことにある。これを作品の創造，創作，創出活動を通して，人間性（芸術性）の豊かな開花をめざすいとなみとみても同じことである。事実，子供が絵を描くことに熱中し，像に刻むことに没入し，音楽や演劇を演じることに昂揚し，舞踊表現に燃焼する姿は美しい。そこには純粋感情の昇華があり，調和と解放と自由と平和と融合と愛がある。Herberd Read（1893—）が，「平和のための教育」（Education for Peace，周郷博訳）所収，「芸術と人間性」のなかで，Platon の詩を引用して，つぎのように述べている理由もうなづける。

描画でも，或いはその他の創造的な活動でもよい，とにかくそれに心を打込んで無心な状態になっている子供は幸福な子供だ，ということをわれわれはよく知っている。われわれはまた，自己を表現することは自己を改造していくことだということを，ごく日常卑近な経験によって知っている。この理由にもとづいて，われわれは子供たちに芸術的な活動をする時間を十分にあたえるべきだと主張する。……われわれの主張は，じつは，そのような小さな，一定のワク内での主張ではない。われわれは，子供の時間を一時間成いは一日増加せよなどと云っているのではない。われわれは子供の全部を要求しているのである。われわれは，絶対的に，どこにも通用する健全さをもった教育の方法が，われわれの身近かなところにあると信じている。音楽や詩や造形美術によって作りあげることのできる優美さは，けっしてそれだけのものではない，それは，すべての知識，すべての品の高い行動への鍵だ，ということをわれわれは信じる。全部ではなくとも，多くの現代世界の不幸は，子供たちがもっている想像力と感情を抑圧し，宇宙の秩序が本来もっている美とリズムと均斉の原理を無視した，論理的で合理的な思考様式があまねく支配したことから来ている，こう考えてよいのではなかろうか。たんに画家或いは画の教師としてのみではなしに，いっぱんに教師または師範者としてのわれわれの任務は，プラトンが詩の香りの高いその文章に書いたように，「本能的に，すべての愛にみちた美しいものを求めるように指導するにある。そうしたなら，健全な気分の中に生きるわれわれの青少年は，あらゆるところから善を汲みとる。そのときには，微風が幸福な国から健康を持ち運んでくるように，気高い作品からくる影響が，幼少な時代から彼らの眼に耳に絶えずそそがれてくることになろう。彼らは，美と理性をもった共感と調和の印象を受けとり，いつ

知らず，その中へと導かれていくだろう。」

**㈣宗教の触発**　学問が人間に影響をおよぼし，道徳がひとの生活の規範となり，芸術が人間性を豊かにするように，宗教もまたひとを薫成醇化する。宗教性はもともとひとに内在する，人間の本性に根ざしている。宗教に向う傾向は，ひとの本性が真なるものを求め，善なるものに近づき，美なるものに憧憬するように，聖なるものに向う人間自然の本性によっている。この意味でみれば，ひとの神への信仰，傾倒，愛，感応，融合，復帰，復旧，合一，帰依，帰投は，人間本性（自然）の帰結であるということができる。そのことは宗教(religion)の語源が，ラテン語の結びつく(regale)ということばにもとづいていることをみてもわかる。reは副詞で英語の背後(back)，すなわち本源を意味し，宗教とはこの本源と結びつくことにほかならない。以前には隔離しており，分裂相違していたものが，本源的なものに融合，統一，合一，同化，一体となることである。不正から正に，不完全から完全に，部分から全体に，末端から中心に，低い我から高い我に，散慢から統一に，末梢から根源に帰っていくことであるとみてもよい。ある学者はこのことを再結（rebinding)，復帰（bringing back)，復旧（restoration）とかという意味に解している。

人類はこうして古くから数多くの歴史的既成宗教，あるいは価値としての宗教をもってきた。仏教やキリスト教，回教などの歴史的既成宗教はもとより，価値としての宗教も，それぞれの方法で，ひとに内在する本性(宗教性）にはたらきかけ，触発し，刺戟をあたえ，覚醒し，本源的なものへの回帰を促してきた。こうしてひとの宗教性が本源的なもの，すなわち神に出会ったとき，歴史的宗教の信仰，帰依，帰属，あるいは価値としての宗教の価値が実現する。この意味でみれば仏教文化の触発刺戟をうければ，ひとの宗教性の方向は仏教的となり，キリスト教文化の影響薫成によればキリスト教的方向に開花する。宗教文化の刺戟薫成の様式が異なれば，宗教に向うひとの宗教性の方向も異なってあらわれるということである。

いずれにしてもこのような宗教との出会いは，ひとによって様々であり個別的である。例えば幼少期の家庭の宗教が機縁となって，信仰に向う素地，傾向を培うということもある。宗教行事や儀式，あるいは仏典や聖書など，宗教書の刺戟影響が宗教性の方向を決定することもある。老病死苦の人生体験が，宗教に向う傾向をいっそう強めるという場合もある。多感な青春期のふとした機会が，宗教への扉を開かせることもめずらしくない。戸田義雄「讃美歌との出会い」(「日本人と讃美歌」所収) は，以上このようなひとと宗教との出会いの秘密を，その体験を通してつぎのように述べている。

私は旧制高校の青年時代を両親の故郷である越後の新潟市の浜辺で送った。日本海に面して盛り上った砂丘，そこへとつづく茱萸の道と松林を散策しながら，朝な夕なに寄居町のカトリック教会から鳴りひびく鐘の音を聞いて過した。教会の鐘の音は，多感だった青春の心を微妙にゆさぶるに充分だった。白線帽をかぶって，はや半年，北国に陰鬱な冬枯れの季節の前ぶれが感ぜられる頃，私は思いきって牧師館の扉を叩いた。牧師はドイツ人だった。日曜日のミサ礼拝と，英語でなされた聖書クラスに出席することを許された私は，今まで思ってもみない別の世界があることを知って，心があやしく震えるのをおさえる事ができなかった。或る日，このドイツ人牧師が，牧師館の出口の階段のところで，空を指差して言われた。「あなたは天にいます神がわかりますか」とそう私に問うたのである。私は一瞬ためらった。そして，自分を偽ることが出来ずに，正直に「わかりません」とおこたえした。私は入信はしなかったが，荘厳な教会のミサ礼拝から受ける或る種の清めの体験が，あやしく千々に乱れる青春特有の感受性に歯止めをかけて呉れたことを信じて疑わなかった。とりわけ，聖歌隊の讃美歌合唱は，異境に游魂する法悦そのもののように感じとれた。何時の日か，神から人への語りかけである聖書とは別に，人から神への賛嘆である讃美歌について，しっかりした知識を身につけたいものだと思った。私の一番上の姉は，東京のミッション系の頌栄高女に通っていたせいか，その姉の口ずさむ讃美歌は，清子というその名の如く，私にはこの上なく清らかに聞えた。私の讃美歌への関心は，家庭にあっては姉の影響もあったかもしれない。

事実，上述讃美歌のすぐれた歌詞，清らかな旋律は，キリスト教信徒にとってはもちろんのこと，そうでないひとの場合でも，深く心に泌み，ひとの宗教本性を刺戟し，ひとを宗教世界にまで導くだけの力をもっている。

讃美歌はその意味で，魂の歌，心の歌，信仰の歌であるということができる。讃美歌委員会編，現行の「讃美歌」(昭和29年改訂）には，全部で567の歌曲が所収されているが，それらはいずれも，ひとの魂の歌，心の歌，信仰の歌にふさわしく，歌曲ともに清潔壮重壮麗である。その項目の内訳についてみると，つぎのような内容になっている。

(1) 礼拝　讃美（1～21番）朝（22～31番）昼（32～33番）夕（34～51番）主の日（52～56番）主の家（57～60番）開会（61～63番）閉会（64～65番）　(2) 神　三一の神（66～72番）大能（73～79番）慈愛（80～93番）待降（94～97番）降誕（98～119番）生涯（120～132番）苦難（133～145番）復活（146～156番）昇天（157～160番）統御（161～169番）再臨（170～174番）審判（175～176番）聖霊（177～186番）聖書（187～190番）　(3) 教会　教会（191～197番）パプテスマ(198～201番）聖餐式（202～207番）定礎式（208番）献堂式（209～210番）按手礼（211番）宣教者（212～213番）伝道（214～226番）神の国（227～237番）　(4) 信仰の生活　神の招き（238～244番）悔改（245～256番）救贖（257～265番）信仰（266～282番）信頼（283～306番）祈禱（307～319番）向上（320～330番）聖潔（331～345番）霊の交り（346～361番）節制（362～363番）服従（364～366番）勤労（367～374番）霊の戦い（375～387番）奉仕（388～395番）試錬（396～400番）友愛親睦（401～403番）送別旅行（404～407番）年末年始（408～414番）母国（415～416番）国際精神（417～419番）世界平和（420～421番）収穫感謝(422～425番）誕生日（426～427番）結婚式（428～430番）家庭（431～435番）母の日（436～438番）学校（439～441番）青年（422～453番）児童（454～469番）　(5) 永生　死（470～474番）葬式（475～480番）天国（481～490番）　(6) 雑（491～538番）　(7) 頌栄（539～544番）　(8) 讃栄（545～567番）

「こころの歌」(日本ビクター発行）所収，野呂信次郎「監修のことば」によれば，以上讃美歌との出会いの体験について，「幼少のころから無意識のうちにきいた讃美歌が，どんなに精神生活に影響をあたえたかわからない」として，以下引用のように述べている。これをみても讃美歌などの宗教歌曲が，ひとの宗教性の刺戟培養に，きわめて大きな影響，触発力をもっていることの一端がわかる。

讃美歌は心の歌です。神をおそれ，神を敬い，神を信じる者の自然に口ずさむ

魂の歌です。人のもっている歌のなかで，もっとも清らかな歌は讃美歌でしょう。讃美歌は歌う人，きく人の心を慰め，挫ける者をふるい立たせ，弱い者に勇気をあたえ，神への高い生活へ邁進する決意をさせる大きな力をもっています。私の小さな経験からでも，私が幼少のころから無意識のうちにきいてきた讃美歌が，どんなに私の精神生活に影響をおよぼしているかわかりません。善に対する認識，美に対する憧れ，義に対する感情といったものは，讃美歌を通してはぐぐまれたと信じています。

これら讃美歌のうち，嶋田尚子による手記「私の好きな讃美歌」は，「私は子供の頃から讃美歌をきき，また歌ってきました。讃美歌の美しい旋律にあわせて歌うと，心から深い安らぎを感じます」と，以下つぎのような優麗な讃美歌のいくつかをあげている。讃美歌はキリスト教信徒にとっては，神への讃美，信仰，信頼，信徒の生活などの表白（experssion）にほかならないが，クリスマスの歌などをはじめ，歌曲ともに一般にも知られ，広く歌唱されているものも少なくない。

**(1) 礼拝**（夕）（49番） (1)ゆう日落ちて空くらく／ねにゆく鳥／かげ消えぬ／星はさめて花ねむり／今日はさりてよるはきぬ (2)神よ／こよい夜もすがら／みふところにやすませて／照りかがやくみすがたを／見させたまえ夢路にも (3)波に乗れる舟人も／道にくれし旅人も／目ざすかたへともないて／着かせたまえ／やすらかに (4)明くるまではみつかいの／つばさをもておおいつつ／こころきよきものとして／さましたまえ／わが神よ **(2) 三一の神**（66番） (1)聖なる／聖なる聖なるかな／三つにいまして一つなる／神の御名をばあさまだき／おきいでてこそほめまつれ (2)聖なる／聖なる聖なるかな／神のみまえに聖徒らも／かむりをすててふしおがみ／みつかいたちもみ名をほむ (3)聖なる／聖なる聖なるかな／罪ある目には見えねども／みいつくしみの満ちたれる／神のさかえぞたぐいなき (4)聖なる／聖なる／聖なるかな／み手のわざなるものみなは／三つにいまして一つなる／神の大御名ほめ奉らん **(3) 信仰**（273番） (1)わがたましいを愛するイエスよ／波はさかまき風ふきあれて／沈むばかりのこの身を守り／天のみなとにみちびきたまえ (2)われには外の隠れ家あらず／頼るかたなきこのたましいを／委ねまつれば／みいつくしみの／つばさの蔭に守らせたまえ (3)わが身は全くけがれに染めど／君はまことととめぐみに満ちて／われの内外をことごと潔め／つかれし霊を慰めたまわん (4)きみは生命のみなもとなれば／たえず湧きいでこころに溢れ／我をうるおし／渇きをとどめ／とこしえまでもやすきを賜え **(4) 信頼**(285

番）(1)主よ／み手もてひかせたまえ／ただわが主の道をあゆまん／いかに暗くけわしくと／もみむねならばわれいとわじ　(2)ちからたのみ知恵にまかせ／われと道をえらびとらじ／ゆくてはただ主のまにまに／ゆだねまつり正しくゆかん　(3)主よ／飲むべきわがさかずき／えらびとりてさずけたまえ／よろこびをもかなしみをも／みたしたもうままにぞ受けん　(4)この世を主にささげまつり／かみのくにとなすためには／せめもはじも死もほろびも／何かはあらん主にまかせて　**(5) 信頼**（291番）(1)主にまかせよ／汝が身を／主はよろこびたすけまさん／しのびて春を待て／雪はとけて花は咲かん／あらしにもやみにも／ただまかせよ／汝が身を　(2)主にまかせよ／汝が身を／主はよろこびたすけまさん／なやみはつよくとも／みめぐみには勝つを得じ／まことなる主の手に／ただまかせよ／汝が身を　**(6) 祈禱**（312番）(1)いつくしみ深き友なるイエスは／罪とが憂いをとり去りたもう／こころの嘆きを包まず述べて／などかは下さぬ／負える重荷を　(2)いつくしみ深き友なるイエスは／われらの弱きを知りて憐む／悩みかなしみに沈めるときも／祈りにこたえて慰めたまわん　(3)いつくしみ深き友なるイエスは／かわらぬ愛もて導きたもう／世の友われらを棄て去るときも／祈りにこたえて労りたまわん　**(7) 向上**（320番）(1)主よ／みもとに近づかん／のぼるみちは十字架に／ありともなど悲しむべき／主よ／みもとに近づかん　(2)さすらうまに日は暮れ／石のうえのかりねの／夢にもなお天を望み／主よ／みもとに近づかん　(3)主のつかいはみ空に／かよう梯のうえより／招きぬれば／いざ登りて／主よ／みもとに近づかん　(4)目覚めてのちまくらの／石を立ててめぐみを／いよよせつに称えつつぞ／主よ／みもとに近づかん　(5)うつし世をばはなれて／天がける日きたらば／いよよちかくみもとにゆき／主のみかおをあおぎみん　**(8) 旅行**（404番）(1)山路こえてひとりゆけど／主の手にすがれる身はやすけし　(2)松のあらし／谷のながれ／みつかいの歌もかくやありなん　(3)峯の雪とこころきよく／雲なきみ空とむねは澄みぬ　(4)みちけわしくゆくてとおし／こころざすかたにいつか着くらん　(5)されども主よ／われいのらじ／旅路のおわりのちかかれとは　(6)日もくれなば石のまくら／かりねの夢にもみ国しのばん　**(9) 送別**（405番）(1)かみともにいまして／ゆく道をまもり／あめの御糧もて／ちからをあたえませ／（おりかえし）また会う日まで／また会う日まで／かみのまもり／汝が身を離れざれ　(2)荒野をゆくときも／あらし吹くときも／ゆくてをしめして／たえずみちびきませ　(3)御門に入る日まで／いつくしみひろき／みつばさのかげに／たえずはぐくみませ

また上出の嶋田尚子手記「私の影響をうけた聖書のことば」をみると，影響薫成をうけた聖書のことばとして，つぎのような旧新両聖書の数篇(章)をあげている。これら聖書のことばは，キリスト教信徒にとってはもちろんのこと，そうでないひとの場合でも，ひとの宗教性を刺戟し，ひと

を宗教世界にまで導く大きな力，薫化触発力をもっているものであることは，いまさらいうまでもない。

(1) 詩1篇　悪しき者の計略にあゆまず，罪人の道に立たず，あざける者の座にすわらぬ者は，さいわいなり。かかる人は主の法をよろこびて，昼も夜もこれをおもう。かかる人は，流れのほとりに植えし木の，期にいたりて実をむすび，葉もまたしぼまざるごとく，そのなすところみな栄えん。あしき人はしからず，風の吹き去るもみがらのごとし。されば悪しき者は審きにたえず，罪人は義しき者の集いに，立つことをえざるなり。そは主は義しき者の道を知りたもう，されど悪しき者の道はほろびん。(2) 詩19篇　もろもろの天は神の栄光をあらわし，大空はその御手のわざをしめす。この日，言葉をかの日につたえ，この夜，知識をかの夜におくる，語らず言わず，その声きこえざるに，そのひびきは全地にあまねく，その言葉は地のはてにまでおよぶ。神はかしこに帷幄を，日のためにもうけたまえり。日は新郎が祝いの殿をいずる如く，勇士がきそい走るを喜ぶに似たり。そのいで立つや天の涯よりし，そのめぐりゆくや天のはてにいたる，物としてその暖まりをこうぶらざるはなし。主の法は全くして，魂を生きかえらしめ，主の証しは堅くして，愚かなる者をさとからしむ。主の諭しは直くして，心を喜ばしめ，主の戒めは清くして，眼を明らかならしむ。主をかしこみおそるる道はきよくして，世々にたゆることなく，主の審きはまことにして，ことごとく正し。これを黄金にくらぶるも，多くのまじりなき黄金にくらぶるも，いやまさりて慕うべく，これを蜜にくらぶるも，蜂の巣のしたたりにくらぶるも，いやまさりて甘し。汝のしもべはこれらによりて戒めをうく，これらを守らば大いなる報いあらん。誰かおのれの過ちを知り得んや，ねがわくは我を，隠れたる咎より解き放ちたまえ。ねがわくは汝のしもべを引きとめて，故意なる罪をおかさしめずそれをわが主たらしめたもうなかれ。さればわれ瑾なき者となりて，大いなる咎をまぬかるるを得ん。主，わが岩，わがあがないぬしよ，わが口の言葉，わが心の思い，汝の前に喜ばるることを得しめたまえ。(3) 詩23篇　主はわが牧者なり，われ乏しきことあらじ。主はわれをみどりの野にふさせ，いこいの汀にともないたもう。主はわが魂を活かし，御名のゆえをもて，我を正しき道にみちびきたもう。たといわれ死のかげの谷をあゆむとも，わざわいをおそれじ。なんじ我と共にいませばなり，なんじの笞，なんじの杖，われをなぐさむ。汝，わが仇のまえにわがために宴をもうけ，わが頭に油をそそぎたもう，わが酒杯にあふるるなり。わが世にあらんかぎりは，かならず恵みと憐みと我にそいきたらん，われはとこしえに主の宮に住まん。(4) 詩24篇　地とそれに満つるもの，世界とそのなかに住むものとは，みな主のものなり。主はそのもといを大海の上にすえ，これを大河の上に定めたまえり。主の山に登るべき者はたれぞ，その聖所に立つべき者はたれぞ。

手きよく心いさぎよき者，その魂むなしきことを仰ぎのぞまず，いつわりの誓いをせざる者ぞその人なる。かかる人は主より幸いをうけ，その救いの神より義をうけん。かくの如き者は，神をしたう者のやからなり，ヤコブの神よ，汝の御顔を求むる者なり。門よ，汝らのこうべをあげよ，とこしえの戸よ，あがれ，栄光の王，いりたまわん。栄光の王は誰なるか，力をもちたもう猛き主なり，戦いに猛き主なり。門よ，汝らのこうべをあげよ，とこしえの戸よ，あがれ，栄光の王いりたまわん。この栄光の王は誰なるか，万軍の主，これぞ栄光の王なる。(5) **詩27篇** 主はわが光，わが救いなり。われ誰をか恐れん。主はわが生命の力なり，わが恐るべき者は誰ぞや。たとい軍人，営をつらねて我を攻むるとも，わが心おそれじ。たとい戦いおこりて我を攻むるとも，我になお頼みあり。われ一つのことを主に請えり，我これを求む，われ主のうるわしきを仰ぎ，その宮を見んがために，わが世にあらんかぎりは，主の家に住まんとこそ願うなれ。主は悩みの日に，その行営のうちに我をひそませ，その幕屋の奥に我をかくし，巌の上に我を高くおきたもうべければなり。今わが首は我をめぐれる仇の上に，高くあげらるべし，このゆえにわれ主の幕屋にて，喜びの供物をささげん，この歌はわがいのちの神にささぐる祈りなり。われわが岩なる神にいわん，なんぞ我を忘れたまいしや，なんぞ我は仇のしいたげによりて，悲しみありくや。わが骨も砕くるばかりに，わが敵は日ねもす我にむかいて，汝の神はいずくにありやと，言いののしりつつ我をそしれり。ああわが魂よ，汝なんぞうなだるるや，なんぞわがうちに思いみだるるや，なんじ神を待ちのぞめ，我なおわが顔の助けなるわが神を，ほめたたうべければなり。(6) **詩46篇** 神はわれらの避け所，また力なり，なやめる時のいと近き助けなり。されば たとい地はかわり，山は海のもなかに移るとも，我らは恐れじ。よしその水は鳴りとどろきてさわぐとも，その溢れきたるによりて山はゆるぐとも，何かあらん。河あり，その流れは神の都をよろこばしめ，いと高き者の住みたもう聖所をよろこばしむ。神その中にいませば，都はうごかじ，神は朝つとにこれを助けたまわん。もろもろの民はさわぎたち，もろもろの国はうごきたり，神その声をいだしたまえば，地はやがて溶けぬ。万軍の主は我らと共なり，ヤコブの神はわれらの高き櫓なり。きたりて主のみわざを見よ，主は多くの恐るべきことを地になしたまえり。主は地のはてまでも戦いをやめしめ，弓をおり矛をたち，戦車を火にて焼きたもう。汝ら静まりて我の神たるを知れ，我はもろもろの国のうちにあがめられ，全地にあがめらるべし。万軍の主は我らと共なり，ヤコブの神はわれらの高きやぐらなり。(7) **詩121篇** われ山にむかいて目をあぐ，わが助けはいずこよりきたるや，わが助けは天地をつくりたまえる主よりきたる。主は汝の足の動かさるるを，ゆるしたまわず，汝を守るものは，まどろみたもうことなし。主は汝を守るものなり，主は汝の右の手をおおう蔭なり。ひるは日なんじをうたず，よるは月なんじをうたじ。主は汝を守りて，もろもろ

の禍いをまぬかれしめ，また汝のたましいを守りたまわん。主は今よりとこしえにいたるまで汝の出ずると入るとを守りたまわん。(8) **マタイ伝5章** 幸いなるかな心の貧しき者，天国はその人のものなり。幸いなるかな悲しむ者，その人は慰められん。幸いなるかな柔和なる者，その人は地を嗣がん。幸いなるかな義に飢え渇く者，その人は飽くことを得ん。幸いなるかな憐みある者，その人は憐みを得ん。幸いなるかな心の清き者，その人は神を見ん。幸いなるかな平和ならしむる者，その人は神の子ととなえられん。幸いなるかな義のために責められたる者，天国はその人のものなり。わがために人なんじらをののしり，また責め，偽りてさまざまの悪しきことを言う時は，汝ら幸いなり，喜び喜べ，天にて汝らの報いは大いなり，汝らよりさきにありし予言者たちをも斯く責めたりき。(9) **マタイ伝6章** 何を食らい何を飲まんと命のことを思いわずらい，何を着んと体のことを思いわずらうな。命は糧にまさり，体は衣にまさるならずや。空の鳥を見よ，播かず刈らず倉に収めず，しかるに汝らの天の父は，これを養いたもう。汝らはこれより遙かにすぐるる者ならずや，汝らのうち誰か思いわずらいて，身のたけ一尺を加え得んや。また何ゆえ衣のことを思いわずらうや，野の百合はいかにして育つかを思え，労せず，つむがざるなり。されどわれ汝らに告ぐ，栄華を極めたるソロモンだに，その装いこの花の一つにも及かざりき。今日ありて明日炉に投げいれらるる野の草をも，神はかく装いたまえば，まして汝らをや，ああ信仰うすき者よ，さらば何を食らい何を飲み何を着んとて，思いわずらうな。これみな異邦人のせつに求むるところなり，汝らの天の父は凡てこれらの物の，汝らに必要なるを知りたもうなり。まず神の国と神の義とを求めよ，さらばすべてこれらの物は，汝らに加えらるべし。このゆえに明日のことを思いわずらうな，あすはあすみずから思いわずらわん，一日の苦労は一日にて足れり。(10) **コリント前書13章** たといわれ，もろもろの国人の言葉および御使いの言葉を語るとも，愛なくば，鳴る鐘やひびく鐃鈸の如し。たといわれ，予言する力あり，またすべての奥義とすべての知識とに達し，また山を移すほどの大いなる信仰ありとも，愛なくば，数うるにたらず。たとい我，わが財産をことごとく施し，またわが体を焼かるるためにわたすとも，愛なくば，我に益なし。愛は寛容にして慈悲あり，愛はねたまず，愛はほこらず高ぶらず，非礼をおこなわず，おのれの利を求めず，いきどおらず，人の悪をおもわず，不義を喜ばずして，真理の喜ぶところを喜び，おおよそ事忍び，おおよそ事信じ，おおよそ事望み，おおよそ事耐うるなり。愛はいつまでも絶ゆることなし，されど予言はすたれ，異言はやみ，知識もまたすたらん。それ我らの知るところ全からず，我らの予言も全からず，全き者の来らん時は全からぬ者すたらん。われ童児の時は語ることもわらべの如く，思うこともわらべの如く，論ずることもわらべの如くなりしが，人となりては，わらべのことを棄てたり。今われらは鏡をもて見る如く，見るところおぼろなり，されどかの

時には顔を合せて相見ん。今わが知るところ全からず，されどかの時にはわが知られたる如く，全く知るべし。げに信仰と望みと愛と，この三つのものは限りなくのこらん，しかしてそのうち最も大いなるは愛なり。

## 参 考 文 献

(1)中山一義　日本教育史　(2)ねずまさし訳　文明の起原(V. Gordon Child, Man makes himself)　(3)久野収訳　人間―過去・現在・未来（Lewis Mumford, The Transformations of man.）　(4)松原元訳　文明と病気（Henry E. Sigerist, Civilization and Disease.）　(5)埴原和郎　人類進化学入門　(6)今西錦司　進化とは何か　(7)今西錦司・Hayek　自然・人類・文明　(8)鈴木尚　化石サルから日本人まで　(9)寺田和夫訳　原始人（F. Clark Howell, Early Man.）　(10)太田堯編　子供の発達と教育　(11)祖父江孝男編　人間の文化　(12)木村達明訳　人類の祖先（Joset Augusta, Prehistoric Man.）　(13)青木英夫　食物文化史　(14)福原康雄　日本肉食史　(15)今来陸雄訳　歴史のあけぼの（Childe, G., What Happened in History.）　(16)古野清人訳　宗教生活の原初形態（Durkheim, É., Les formes élémentaires de la vie religieuse.）　(17)関口俊吾訳　絵画の歴史　(18)石田英一郎　人類と文明の誕生　(19)群司正勝　郷土の芸能　(20)佐々木理訳　古代芸術と祭式（Harrison, Jane Eilen, Ancient Art and Ritual.）　(21)波多野精一訳　実践理性批判（Immanuel Kant, Kritik der Praktischen Vernunft.）　(22)朝日新聞社編　忘れられない本　(23)紀田順一郎　日本の書物　(24)周郷博訳　平和のための教育（Herbert Read, Education for peace.）　(25)人間形成の明日（原田実博士教育学記念論文集）　(26)原田実　教育と宗教についての一考察（「小林澄兄博士教育学記念論文集」所収）　(27)小出忍訳　キリスト教信仰の探求（W. T. Purkiser, Explorig our Christian Faith.）　(28)讃美歌委員会編　讃美歌略解　(29)小林国芳　宗教教育論　(30)小沢恒一　青年教育概論